十竹齋書畫譜

三、四

十洲記 考唐

4
56

東京圖書館

類	屬	函	架	号	冊
		四	二	五六	四

十符の菅蓑卷三

近藤芳樹

廿二日　猶雨ふる。白石のうらまゐり。上杉の家人甘粕備後といふ者のもとに。慶長五年より。伊達政宗に責落され。その後庁倉景綱あづかりしよりて。代々こゝに守まゐべ。賑たゝる里なるべく思ひしよりむつかしきかれる小家のこゝなりき。町のはづれより小あり長き橋こゝまゐり。やゝ高き道乃かたちなる。低き山の麓と川なぎれたる。吟香ゆびきして。ほのぼのい信

東京帝國大學圖書之印

濃の姥捨に似たる山うれと思へど。この川を子捨川
といふことそうなれど。こゝいふみえれいなしぬ。宮の
うしろに至る。まゝ川あり。こゝ白石川と子捨川とお
ちあひてめぐりて来たれる也。流れゆくひろくて
にちかくゝ川といふ角。ちまちまやの東方そづ也
と。岩代と陸前との境とをり。ゆくゝ北に出て。藏王嶽と
いふ高き山うゆ。峰に藏王權現のやしろある故に。
名におつりとうや。まゝとゝ式内苅田嶺神社に
ておそうまつと。いつの世より。藏王ごといふ佛めく

神ゝうまやをうけけん。うまやを宮といふ。この神社み
よりある名ゆて。里人は常に苅田宮と唱ふるなり。但苅
田の神ゝうは。うまやより北二町ばかりの里みありて。祭
神白鳥明神。ゝ日本武尊の霊をまつる。藏王
嶽ゝ。六帖のうたによめる不忘山の事ありといふ説
もあり。こゝ山むかしは常にうえうしが。今いろふ
里ゝゝびとをまりとぞ。おれうこゝみわたりまてた
ぐひなき山みれん。
あゝゝ代のしげきあづみわれずと山の名ゝ

ことをうけたまはれ
はべりける関も近きにうちなるべし。金が瀬大河原と
申す。船迫にありぬ。むかし源頼朝の。桊衡を討し時。そ
れに西木戸國衡が首を。畠山重忠より。實檢にそなへ
しかこれいさかの日のくれみ和田義盛が射殪したり
しを。重忠が隨へる大串三郎。首をとりて重忠はたらい
たりたり。されど義盛が中所。いつたを死きたりて。重
忠首を得しをとひけ。義盛もまたあがちに功を
とりあらそひき。まさに頼朝。このうまれかたて。河村千鶴

丸がかうふりさせたりを。石橋山の戰ひより。この者の父
兄。これ平家にまして。頼朝を苦しめ後。こかしたる身
とひそめて。さきにひたりしが。たちまちそなり軍に
たちまちがひ来て。かうして戰は名をあげこのび。加賀
美長清を加冠らして。四郎秀清とかのせられけり。
重忠義盛が事をかくそなへぬ。頼朝乃恐をおのそなへぬ。
共が後の代はかうり傳ふいき物がなりたり。槻
木と岩沼とは間。右のうちに入て。道祖神社あり。實方中
將の馬はうまつ所なり。中將の墓も塩手村の山乃

ほとり竹むらの中にあり。所の者ども。神とあがめて
たふとびまつれり。この朝臣乃とくつれりしぞ。
端午に。かつみを菖蒲にかへてふくなど。民もしける
事かくの如し。さるに實方。殿上にて。行成卿の冠をう
ちおとしし罪によりて。みちのくにさすらへられしかを
いひて。をとこしかるざりし人なり。さきげしをしき
うたよむ者はなれど。仙臺の源子和といへるが。西行乃
撰集抄をひきてあげつらへる事なり。さるは實方の。
さくらがり雨はふりきぬおなじくはぬるとも花の

かげにやどりせんとよみて。木の間をもる雨に。さながら
ぬれはて衣しぼられけりしを。行成ひとり。歌はおもし
ろけれど。實方はをこの者なりと譏られけるを。
實方これを聞て深く恨みふくみて。つひに殿上にて。
行成に恥をあたへき。これ實方のしわざ。そとおもしろ
らぬふるまひなれども。行成の。うらぐを謗りて世に謡
ひ。さえをおしみて能をそねまれし哉。こころよのうば
おもひみられけりけんが。かく事にふれて顯はれし
にや。實方のつね乃行ひ。しのびかねぐしつらんにや。な

ごがされて下らる時。花山の帝。いのでられとませ
ゐひて。歌たまりる。べき。その外まる。大江匡房卿。大中
臣能宣朝臣などの。そ結世にきぐれ。る人々とたぐ
光。をとこ。をとこるゐあまる。これ歌。ふをおくりる。殊
に能宣の。わてうるべきうられなりきゐ。ふふとも後の
乃よむせぐまゝ。やい。とよきまゝへ。初二の句よ。限り
ちゐ。ちうと含をて。詞にをなりきされね。罪おきさ
まをいひかをあらきをり。耳をふひ目といふ
むが。おの自うるの世乃ちはゝ。ゐるを。義和が此あげ

ばをひい。名高き行成のうををひをで。いとよくいを
きをりは。十二時をるに岩沼ふつきぬ。なふくま
川。このわりにをんいを廣くなをり。をより東ふ
をゐれ荒濱といふ處ふ出て。海に入るよりゐり。ゆど
ゐをつくをゐをを吟香をとりゐひて。竹駒稲荷よま
うづ。樓門中門などよりあをて。をゐ社をり。かををれ
る竹駒寺が。こをひの行在をり。いまぐ著をあるぬほ
どゐまど。御輦を拜をりんとく。人立をわぎがゆよて寺
の前より。右のうを結ほを道よりで。ある家の門よ。

たちまちに枯れて松となるべきなり。されどこの松は幹ひとつなるものが二株ありて、二木たちならべるにはあらねば、かりのちに枯れ松は枯れぬべきなりとぞあらん。まづ稚松なり。されど須賀川のわたりなりしが、誠の武隈なるべし。この松、岩瀬近き処ふたつまでふる歌ゴ。

みちのくのふる木乃松と人とはば岩瀬の川の西とこたへよ。

とあるその證なり。とうけるものもあれど、此うたいかの新集に出たるまつおぼつかなく。

また後拾遺集に、能因法師。

けふこのの松はらめらびぬ

なるべし。ふるきをたづねわまはぬ事なりけん。の左注ふ。みちのくにふるひとりて。後のちびの武隈乃松ゴ侍らざりしなれどよめるなれん。とかかえ裏書ゴ。藤原元善。橘道貞なりとぞ。守たりし時に植たりしを孝善これを伐りてるよし記して。いづまたこれ國司のたまる館なまへ。ちかゆ生ぞ須賀川のうちなりゴ。ちかゆ國府に近くて。それまやちまあるなる。なほ後の人かんぞふ。

孫七郎

東夷征伐二千年。倭武餘威赫々傳。今日昇平王化洽。
人烟以外又人烟。
草木欣々雨露滋。恰逢龍駕向東時。小民亦表來蘇意。
茅屋柴門挂旭旗。

廿四日くもりれり。岩沼增田のあひだを名取川なごる。中洲ありて橋をふる所なり。この邊り。さくみ小學の生徒五六百人つらなりゐる。岩沼のあるあり。あるまる二百人ばかりなりて。その児へ洋服をあたへいるゆゑに振袖まで。まち迎へ奉るが

ゆゑ。增田のあるべし。まづ增田のまちなか中ほどゆみや。とおりゐる處ゆ。いと大きなる花笠ゆ。燈籠つけて。ひぐまるぎたるべれて。そのわらべに白をあまるおきて。十五六より。はるもだりの女ぞゆ。白きゆこのうを高くかゝげ。紅の裳の裾ゆつゝて。あれど声にうたうゝひ。はるゝをのゝく麥つくる。天覽みそなるゝ。此あるうよ。はるるに塩竈松島のうゝみわるさまて。なるあるあくあるしるゝ。さるゝの宮城ゆ近けれべるや。をゝと女の姿ゆゝゝで。行幸ゝ

に出る者。中田長町の間。道もきりあんべいとおれし。此長町ハ。ひとつ乃うまやなれど。宮城まで家ある所ばかりなり。こゝに菊池善蔵とて富る者ありて。御憩ひ所とかるべき舍をこゝに作りたり。庭ハ大きなる松にて数を。顧問近くきりつまりつゝべ。ゆゞとそのかゝ蔭みあり。こゝにて。あられ松や。千とせも君のきぬゝぎにまれとこゝにふきて。

大君の名をまもるゝ蔭なれば衣笠とこそいふべゝの

つるかれ

といきまいけり。顧問ハうなづきたゝ。こゝにまんとて物せられたるみいあるねど。そのことばのおのづゝ

うゝこの神なる式。聞めでさせおひて。いとおもしろき名なり。今より絹ぎさ松といふことのゝ給ひて。正風に。いこのりぞおもてこと仰られたまべこりあんべ

宮城の山なる帰雁なる法やゆづるんやつゞの大君のき

ぬゝぎきた松

こよめまゝそ。いつゝの宮城みいりぬ。のゝい仙臺と

いつり。きれどこの字い。聞老志とゝふ書み。往昔有太

白山人者。遊息于斯地。隱見于人間。幸遺其仙蹤焉。故号曰仙臺。ちなんで不稽しる事のそつるる名なれば。維新のあらんときに改めつる也。るれまるり。きいいんゆぐ町乃うばゆ如ほく。賑ちーらく。行くふ人のすぐるも多くびらぎ。町のはまで。鎮臺の陸軍少將大山某指揮官まて。いくあまの兵隊をひるる御迎へるものをり。その礼おこなそぐまて。御輦のきるあるる。喇叭乃聲乃ちっきより外ひる。耳まきこゆるものの形く。いと静うれり。つぐきく師範學校の生徒も百人ばかり。洋

服にて迎へ奉きり。十時過るころ也。ばくどが岡の行在かつらをぬひぬこていふるく歌にもある名所まて。めとく伊達家の遊園なりしと。梅原某といふ者ひくりそぞこるほどい所の名まあふばくどの盛ひ也。旅のあ目んめをなぐさめあれるべし。おのれらもやどりにつきく。ひる食の後。顧問まとなひ。林子平の墓。見まゆ也ぬ。龍雲院といふ寺のうちああ也。そこより青葉神社まに至る。伊達政宗乃霊を祀きり。まく大崎八幡宮といふにまるでぬ。神殿拜殿の柱う

いぢりなどに。彫物こまやかにして。彩色ありしも。ここ
ろまづらに剥げるゐ。うゐゐの色きえて。中ゝは神さび
たるのみなり。午後五時より。御酒たまはるまゝにて。行
在まりめゝつまごゝ。おのれいとゝ所ありてえ
まみるべ。こゝひとゝのの便りつきて。皇后の過
ぎ十三日の月次の御會より。年ゝ郭公といふを題に
て。

みちのくゐ時鳥ゆきもむ郭公こゝろ
しとゝもたゝき

ぬまませぬ。と渡忠秋よりいひおこせたりしに
して。正風にきゝもせぬ清人のまこと。詞乃
うへにあらたまそいとめでゝ。
廿五日くもる。ゆふい。師範學校。英語學校をゆきて
ゆきありて。國分町の米川重次が家をひるの御慰ひ
所となさせぬひ。まこと縣にまうけし師範学校にも立
ちをあつりてこのやおのれいみとゝつこのうまつら
ねば。ゆゑのあるゝ乃行なるゐあて。こゝかしこ見あま
うぬ。まづ遊園に入る。いと廣しめづらしき草木ども

おほく植わたして。らの花ども。岡まん。青葉が中にさくらはたゞ咲白ひ。池まん。さざんの波ふかきつぎて影をうつし。所〻うこなる煎る菴。酒くむ肆をなす。つまく。あしろれば花びらうけくもわたれたてぬ。かくてそこを出て。大手ごゑりの坂をくだる。有倉らこの名つきて。白壁にぬまる長屋。ひうこぎにあり。今いこなる倉もふまうの物ゐまりうれを。右のうをるを。内ゐ床かまへて。博覽會の場こせり。くきくの物のふるきあるをしまを。いと物ゐくつねれり。それ

が中に。男女八千九百六十三人の髪乃毛りて縫たる曼陀羅い。巧をときはめたり。まこ明の至元々年の銘なる七弦琴ゐうるしふ断文の顯まてる。古物なること と考るし。鬼一文字といふ笛。鳳凰丸といふ舩形の物きものの。さし渡し二尺五寸の堆朱の盆。多賀城の瓦硯。うらに文治元年為此硯後代殘周支。こゑりて。二合乃署なるれど。そを世よまを形るのもの。殊ゐ支倉六右衛門こいふ者の像乃油繪こそ。ていねいくめづらしき物なりけれ。是乃ゆう。まこく西洋乃人のさまをしる

に。鮫柄の短刀（ちひさがたな）および、ちるかん。皇國（みくに）とわたるべき所
みえず。まと合きて。いとゆる耶蘇の十字架を拝を
たるい。かれらかなりしほど。その教をうけうし成
ぬ。そもく此者い。慶長十八年ゐ。伊達政宗のよぎく
まにく。横澤監物（よこさわけんもつ）とゐふ者とふうり。南蠻にわうりけ
るに。監物とはじめ。船長（ふなをさ）らも。死せるが如ものりくう
ど。支倉ひとり法（のり）がく。使の旨を畢（をへ）く。元和六年ゐ。
らの國にかへまる時。南蠻王。らの像をかしめて六右
衛門ゐつのんせりとぞ。らの南蠻い。西洋のことにて。

そもほどいまぐ世の中開けさりしゆゑよ。かく世
るまるべ。おりふゐ政宗。ものく眼と西のうち物あ
るまつかて。かく支倉等をたのつくい。彼が強弱と
うぐひもうて。事のさまゐ従ひてをむつびもしうち
もせんと思ものまるべ。ものれど。異教の禁
おうりて。波路のかよひゐわづらもくもりにこの
ど。中ぞうまて。ゆうありにうそ。其後十字架をぐける
ゆゑに。此像世ゐ出しぐさくて。おもづこう倉のそと
ゐうづをれゐうりとそうたびかく。ぐり出うる仏

ゐ。こゝを出て。舊藩の城きまでゆくしるとをる。まに名取川の流あり。橋をこえてゆくば。山本に矢倉門あり。こゝをうちぞ。りとの本丸なりける。今ハ鎮臺となれり。矢倉などいふものゝ崩しりん。みえず。藩主ハ城の左乃ゝに。館をくまそ生きき。伊達斤倉などゝふ家老の家どもハ。名取川と本丸との間にありしとぞ。昔とゝなびて

正風

志ぎり名書塁が園乃ゆるげと楷のいろまを

通禧

芽も未を恵ゝ弘春のかてをそれつゝが園のさみどりまの函

廿六日の日曇まり。ゆゝしたのほど。鎮臺の整列式をそなへて。きのふ弘如く。ひる乃御饌。米沢重次が家に奉まり。午後ハ士族のうち。騎射あるこれる者ぞ加ゝらひ催しゝ。笠懸をゝそれハせり。遊園りて。行つり。それより鎮臺の本営に入ゝ

せなひとおり。きのうとやらふ。埋木のてつてきるくさ
くのうの。天覽に備へたてまつりうるを。おほんこ
ろうみ侍ひて

正風

みちのくのあふくまゐ川乃うゑれ木の花さくころよ
ひかれをあまりう
くまて後。こゝゆうのふることをてまつり。ひらきゝれべ。

本居豊穎

玄惣殿の木の〜たる雪まをて玄惣の花ゑ初しみ

むらさきゝん
ゝ〜とて水いはあきの結山のあまを月ゝゝわま
よりゝのんゑ
廿七日ゝゝ晴ゝゝ。松島よみゆ〜〜あふ。おのれをか
ほん供てのうまいてる。宮城と出て。原の町とゝぐ。鎮臺
の軍兵。ゝゝびゝちゝく和ゝりたてまつるを。こゝと原
といふハ。宮城野の原ゝ以ふ屬ゝを。省ゝるれゝ屬〜。
今ハ野といゝん所ゝ〜こゝにて

具視

下雨ふりてむつかしけれども。四時ごろ出る。

過て原町に出る。まさごの利府なる。小學生らなりまさ出て。礼をなせり。今市に至る。こゝも冠川といふが流れて。搗かゝる。われば岩切なり。左も國幣中社志波彦の神ゝなりそこより利府をへく。松島に至る。出ぬ。こゝ。むこの菅薦を出せる所なり。こ里人いとど。まこゝろいこゝろもあるべきなり。この外。末の松山も近き国どもなれど。まづ此わりにい。政宗乃事

好きて。よそなる名所をうつさるるが如ほうまいぶ。こゝぐくもうべまひがて。十一時ごろも松島につき。ものるけこゝべて。おのれい石牧よ。大塔宮のかうま給ひしなとありときて。たづねるのに。吟香さろまの永田盛信をとりかくて。高城といふ処よりこゝちに入て。富山といふ高き山あり。松嶋を望むまゝときて。のぼる。麓よりあゆみるみ。いとさこゝろ。いくなあ。それは寺なり。大仰寺といふ。此庭よりえおろせば。ちひさな島あまた。波のうへにようびて。

蹲踞るが如きあり。たちのとるが如きなり。あるいは横ぢりふるゝなど。水の烟乃あるひくる。さまくのたゞたゞえがくきゝて。なるこゝき海のありさのけしきなり。西の國乃こうるにはい。この浦ゞのあをきくあるぬ所もなかるとあり。そハ播磨より長門まで。百里にあまるまる間うち海あて灣も小島もいとあ間こうるゆゑにしこの紙。東北の大うをにいきる処なくて。めづらしきまゝに。松島おのづこう名を得うるれ紙べし。簀子ゐ腰くけうれど。あるハ行幸ありこうく。法師ゐるを

き清色ゆいうきこうつ。殊にあゝうらゑ。ゆとゑ紙道にありて。車をいそのせくゆく。小野といふ所ゐ。なうゝゝくかうる長橋あり。わうりて矢本を。石乃牧ゐつきぬ。戸塚貞輔といふ者の家をやとりとゑ。廿八日天氣よし。戸長瀬上則明がなれはそうり隨ひてやどりを出づ。坊の辰巳乃方ゐ北上川の湊に入る処あり。船よりうりて。南を見わうせば。こまゝる大船ゐいとおほし。まゝ坊あり。過て五条橋といふをうゝり。左ゐをれてゆくば。大門崎といふ所の山本に

神社あり。一皇子龍神兩社とのける額あり。こゝ
一ノ皇子が大塔宮の御事なりとぞ。宮ハ三の皇子なる
を。一皇子といへるハ。大塔宮の御名乃。世ゐ高く聞え
わたりしまゝに。田舍人のそれとなくいひしなり
るべし。あのきらとなづけんとてふりたゝ来りし
い。南山巡狩録といふ書ゐいさゝか記せる事あるとて。
年久しく思ひわたりしにより。てれまり。則明近き
所より。ひがりの翁を率て来れり。この者。こゝのわた
まち塩土のとぢまるゝにて。いくるいりと一皇子

のこゝ。四十年ばかり昔ゆゑ。ゆきゝく御墓石のあり
しを。神に齋ひ奉きるとぞ。下に埋めるゐやあらん。と
いふ。石垣高くつきめぐらして。其うへに神殿を建るさゝ。
さゝありけん。とおもはる。ゆゝ龍神。この十三四年さきの
かさ。船長らが。社人とうたひてあまを祀きりとぞ。社ま
ようきゝて下りて。墓の如き石ふるゝとぞ。梵字うきく
殘きり。近頃までい延元のゝ年ゝがいつとなく
雨露ま消うりといふ。所乃ふる紀傳ゝまゝ。淵邊伊賀守
心ありし者まて。鎌倉の土窟より宮を出し奉りおわん首

をば道みちとうと偽りて。をちのくにに。流るる乃人おほかれど。密かうこそなひ奉まつるこのど。頼まをぬ人ら顯家卿もうち死しぬむて。おほんきくをうひまく。正平元年九月みをまつのをとをぬりといふ。きれど證となるべきものいさきにかしこ。たぐ野村某といふ者の系譜ありて。きしに後醍醐天皇之宮。東國御下向之砌。供奉之臣藤原朝臣六角判官為良系。と記しられど。後醍醐天皇乃宮とのたにそい。護良親王ゐや。義良親王にや。さぐてのかうぐ。この法この六角判官為良といふ人のことも。他書みなあるこねば。おぼつかなく淵邊が裔い。今もいかゝき民みありてこにありといふど。これきさいふつゝのをみて。たゝこのかるる證なぐもなるれば。いつと法どくこて。ぐねこうひもなきこちせま。かくてそこより。北のうち弘田中のみちをゆくく。右のうち弘ふ民み。おく深く山めぐりて。げみ隱きんおいよ弘所なり。山乃ふもとみる古墳あまこなり。これらこれ宮ゐ付隨ひまゐうせ者どもの墓なり。といふ。このわうをきべを御所

のいまといふ。いりとい谷蔭をいふとちのく詞なり
そこのや。あそまこの宮。わのくおくまま時より。を
しく賢しくあはすうだ。そのど逆臣高氏が詭言う
廣ゆをせ。あそびび。まこと宮代のうつめをむこの
しる高市皇子ゐもすべてふとまをあいまゐ
のを。と思ふあを。いとやあこしく口惜しくれば。淵邊
がたそのまをて御供つのうまゐ。かくし奉ゐ跡
ありと聞てを。みりはくそもたぼねこまりうう
に。かくこそび乃大御供のついでを立よりしい。こ

ころのねのひうれひて。たくのるおはん事蹟をび
え見認めぬ物こう。くうまくうまん。こくを過て。多
福院といふ寺あ入る。寺主門まで迎へあ出て。袁のこの
こにあるいを。そこに後醍醐の帝乃おはんたああ建
たるよくる碑あり。思ふにこん。崩御のこと聞えその
ち。經文などかきくれあくべ。碑をるべ。奉為吉野
先帝菩提也云と鐫りて。かくそこに延元二年のの
うをくのこれり。この二をるき書どもに。三字とお
なじく用ゐられた。四年のことなり。それを天皇の崩

と。太平記は三年といへども。そは誤りなり。水戸の参考本。まさに大日本史などは委しく辨へたるが如く四年こたるせ紙を正しとせり。まして當時それいち建たりし碑は。かく鐫りたれば。さらに疑ひと容るべきのなぬ明證少からぬ屋し。されいこと大塔宮の。其ほどなかまぐ物なりまして。建させ給ひにや。まことに人のたてしみや。委しく知られぬ。べちは事のよしあるを碑もあれど。こいたのをかし。ふる苔はとまりまりぬ世のそなたこうもわまりたどれ

を跡のみえつ
たび衣たちぐみぐまして古へ成しのぶとりあも
なきる袖かれ
などこちぞきひは。九時ごろに戸塚氏みかりゆ
て。まさに則明ふるなれ。蛇田村の禪昌寺にゆく。田
道の墓とそんとそれり。寺のかたへみ杉の大木ふる
りたそり。そは下ふ墓石ありて墓いなり。さるいふ
さは石なる故は。里の兒輩はめくりのそびをものみされ
ど。常い寺にとさそんあくよりにて。則ち禪昌寺にいり

なるゐ。住持ひとりいでくりて出こり。表ゐ霊蛇田道公墳と鐫色り。公い此人の姓なり。かさちに一行こつまてのゐる文あり。めゝ篆書めゐてよめゞこゝ。これゝ真物なりんにい。仁徳の御代の頃なりゐ。やたそりん。さてい皇國のうちゐ。これよりふるゐいなき碑なるべおれど。石乃質めゞ法様など事好める人乃いつそりはこまるゐやの疑ひありてうけかゝくおぼゆるそめこり。委しくたゞをいとまゐくて。その處をさりぬ。後ゐきけゞ今いむこり。塩釜神社の神官藤

塚知明といふ者。ひそに此碑をつくりて土乃底に埋めおき。享和元年の五月ま堀り出てこゝり置たるよゝなり。さるいかゝ狂あぢきれゐ事をなどそゝりうん。とおもふに。その考證をこのきて。博識の名を世ま賣らんとそのわざゐめて。そゐたゝ。ぶこゝ。江門ゐおこゝまこりゝに。そゐこゝ名そのき千蕃春海。水戸の赤水なゞゐ。一そびい欺こ迷たりしとぞ。こゝよ車をいそのきて。午後二時ごこりに松島ゐかゝり。ひらけたらゞこく。瑞巌寺ゐまらでぬ。この寺い。仁明天皇の兼

和五年ゐ。法身といふ僧。爰に天台宗をひろめて建さ
まこのほど名い松島寺と申す。法身ハ入宋の僧に
て。經山の無準ゐ法をうけ。その後北條時頼。圓福
寺と改めしと。慶長十年ゐ至り伊達政宗再び建て輪
奐いとうるはしく。まさに瑞巌寺と改めり。この
地うしろゐ山環り。前に海たゝへ。海士が家近き寺
なれど。いと物しづかなり。門を出て観瀾亭にいこひ。
沖のこの方眺む。こゝハ政宗。伏見の桃山殿の材ゐ
て。いとたゝ建ら造り亭。この年久しくつく。つ

くあ造りなる。とよべゆどりし石牧の戸塚貞輔。を
ましたりしゐ。こゝびの術いこひ所なる物造り。貞
輔がふる紀と存さるほしく初りつる心ぞゆゝ
とて。紅白の縮緬二反づゝ。ものつり。
ゆはしうとゝゆき結れむ松島や磯のこまゆる波
にあらさで
ひまつ日佐光仰きてものゝ
徒用さらん
こゝあくよある人このうゝ。

さけ[illegible]かく色彩をれ松為法のく為松まの小
舟ようをりも

徳大寺實則

たゆしかな君ぐ[illegible]とまつ盍史波さく子世の色
をこのべく

東久世通禧

為づひ松こぎ[illegible]れをわが世どの在にとゆふ松
ぞくくて

正風

うちよせる波もちとを紅まばふ彩りはよのうゆ
きとまつこぐうらしま浦

高柳秀成

次大山少将韻

木戸孝允

萬態風光落眼前。布帆點〻夕陽天。聖恩亦許陪遊豫。
又上松洲詩酒船。

正定

松洲三日滞金鑾。朝霽暮霞佳色攢。愛此觀瀾亭下景。
翠嵐鎖處白帆殘。

夏遠情といふべしあて。きさいの宮乃よまをぬる。

松島やをしまもあまもこのゐいめしてをしほなれ袖

ぬるをしほ

後よきけるまゝにりの一つ。さて盛信吟香とこゝに

小舟（をぶね）をかりて。塩竈よわたる。舟長掉（ふなをさ）さして。こゝかしこ。

おのゝこる島の名を轉（えづ）ていふ。その一き名ひとつもを

しらず塩竈ちかくなるまる處に。桂島といふがあり。こ

ゝも名をあらうしぶかり。まゞ暮をていせねど。月の光

ゆゝしくあまれば。

ゆゝしおもてさはやまる月の桂島をるとも舟をよ

をくわまをえむ

塩竈につきぬ。松島もしほ目がまゝ。これあまの笘屋の

こゝあて。ゆゝしりいつきたれし。こゝまる物のこゝハ。縣（あがた）

まるまをこゝび入きるよりあて。垢づくのぬきぬをりけ

ず。こゝもひ海のおりてあ。燈火（ともしび）をいとものかく流しをる

が。波よたゞよくるさ。月の桂乃花をやちらうこゝび

たゝまうんと思ふをこの屋。いとをでしくをえをう

實則

又ゆくむ月は新さへ出てしづのみをぶる
ほのぼのとなりぬ

敬直

さゆのよもすがらおのひし塩ごゑ乃まつをさぐ
まり自かつふきぬ

ゆうくふくるまひて物淋しくいねがてのまつみは。は
くくとかんがぶ新に。こゝ名所塩がまの浦ハ。古今
集伊勢物語などみえて。つゆふるれを。松島ハ詞花
集にある。松島の磯りむ迄るしいのしたづ乃おのがさゑ

ぐ見えゝるを代れ。てふうるより外ハ。それの集ども
にも見なゝ。のまぶ昔ハ塩竈の名ばゝ高くて
松島とハ歌枕みもとゝく取出さゝしなゝ上宮
太子の松島とよゝみるがありと。ふふハ。後世のよ
ゝをゝとゝ形まぶ。こゝるよ名ゝ。ひとゝ。
いのぐまゝ。ぶみ眠らんとまるは。ぶみ。夏の夜は
ゝ形くゝて。空ゝゝゝ。
廿九日ゝふもてけよ。ぶく起出て塩竈神社にまゝ
づ。壇かづゝみく。正風みあゝり。ゝもに沖のゝゝと加

屋うえて。

ゆくさびのほそてとれるいしぶまを結浦こく紅

のはれてなりりを　　あの春

月ぶまをうえみをれ芋り仕へはをの新芋ぶ

桑成ふをうらめやい

廣前ゐ参りたるゐ。ゆくうを神饌奉るて。神官ど

ゐ。ゐ衣き。紙りて口塞ぎ。御饌所より持をぶさま。

正風

廻廊ゐ伶人ゐをゐて。奏樂をるれど。ををゐうらいと

かうくしくおぼえく。心もすをうりを。今の神

ろを。伊達綱村中將の。元禄六年ゐ建られしよりて。

右宮ゐ武甕槌命。右宮に經津主命。別宮ゐ岐神を祀る

ゐ。ゆをせく三座これを此國の一宮をして。塩竈明神

をまをれ。をうり。されどをう。祭神をる。綱村のと

きかく改めをれゐ。宗久紀行ゐ。日くるほど

に塩うまを浦ゐつきぬ。神體ハゆぐて塩釜をてわと

らせゐふ。をあり。これ正しのるべし。さる紙釜ををて

きといそんい。物げ形しとおもひて。古傳をくゝて。かく社如く之神ゐ改めるせう形ら色ど。釜を祭まつる何ういあしかるべき。京都の平野ハ。廿二社のうちゐて。いとたふとき神なるゝ。それもう御釜なり。されどもそれ平野も。中昔に祭神をうゝるを。釜といふを嫌いるなるべし。まして神主などの。ゐゐしいの事くもしくたどりぬハ。なるものをつるもことわりなるべし。社前ゐ泉三郎ゞ奉まつふ銭の燈籠あり。おゐ一対笠のうちしけまゞらしに。天保年中ゐ盗まれしのゞ。補ひうつ。そをつき。吟香いと燈籠ゐいあらゞ。のといい佛龕ゐそやなりうん。といあり。ゆゞりにうゝめて。朝食ゐうゝゞく出うつ。主上ゐを。おのれゞ石牧ゐ行うゝし日。松島の瑞巌寺ゐ法せゐひて。午後二時をるに。泉郎どゐ。簀立しそを奉まつ。簀立とそ。潮のうつとそ。簀をたてきうく。于汐につきて出んとそる魚を捕るわざゐて。いづうるゐる事なり。とうや。さて廿八日のほとそて。冨山にのぼらをゐひうる。そのをう

登臨最好冨山東。無數青螺指顧中。斜日帰帆沈遠影。
沙灣潮落海如弓。

木戸孝允

三面江灣二面山。翠華遥駐水雲寰。塩松八百餘洲景。
總在鑾前指顧間。

土方久元

松洲落々漾煙波。勝地由來詞賦多。我取斤言評此景。
瑠璃盤上散青螺。

金井之恭

九時過るほと。まつ〻松島の観瀾亭ふかゝをめひて。御船より。塩竈の法蓮寺についをぬゝ。かゝそけさハ七時ばかりふ。御輦のそひせり。おのれもおれド頃ふ出さらて。顧問とうふ車といそぐ〻う顧問ハ末の松山野田の玉川のうにむうをきけり。こはまつゆの末まふ野田にふあゝぬよりれど。猶いうゆる所あるあらん。とそゆのをたるまり。おのれを吟香とうり。多賀城のほとを。礎ゆつとゝ法川ばかり。畑中にあるを行とゝ。ふるをたるとふ。

されぬさまなり。そこより二丁ばかりのやとおのよ所よ。碑たてり上覆ひ結屋して。そのうちにまたあり。これと壺碑なりといふ。多いたづら。久しく草むら乃中ふうづもれて。ほとんどまとを近く知る人もなうりしに。水戸光圀黄門の。伊達綱村ふこそまてふべ。綱村その家人田邊某りそうさをく。おくられるが。此碑乃世よ顕はまてはじめ。其後元禄十年よ打そめしより。普く人のまて聞ふまそ。文のまに用に飾なれ。字の舊き様なる紙。そのめでたふとふまと

いかなりよけまとそ。但此碑ふ。奈良の御代ふ建うと いふい。ふうにぞやまで疑へる人もあれど。そ中に。みちのくのうちうがまそ。さてまうづてる為色言まく。田道の碑とへなうべいふ為くあるぬたぐきまのれり。残篇風土記ニふのものあ。字とば見雲真人といふ人乃かりまよりいてれど。そ結見雲ふの なる人まの。詳うれらば。ゆらむにふ。晋唐のうば結ゆうと。深く学ひ得うる人なるべし。されどこの風土記。のちの世のあ結めるまべ。たうにいひぐて。

以くさ〳〵ながめ侍る折ふしなれば
き多変のあるべき

徳大寺實則

滄桑變態幾春秋。一片殘碑荊蘇稠。臣子豈无多少感。
親臨問古繫華驪。

東久世通禧

柱礎存邉長棘荊。殘碑讀得字分明。豈圖千百餘年後。
龍駕未過多賀城。

杉孫七郎

そもそもこれは小鶴の池とぞ。燕澤の碑とぞ。里人いふ
つたへの碑とぞ。こゝは蒙古と訛れるなり。弘安五
年のころ。元國の僧。もろこしの國より投化きたりしが。戰
役しるす人なりけり。なるゝ古字
を用ゐ。なるゝ字畫をもてなるゝなり。めづらしき人のえ
よまぬ碑にこそ。當時蒙古の為よもの事を
書きたりと。それぞこゝろ後ゝまきまゝ。田道乃
碑造りし藤塚知明が考へきたりしなん。十二時ばかり
宮城にうつりつきぬ。きのふのふるい所ゆく〳〵碑

にもゝせある日なりけむ。まうでこしや金花山の神づよさ梅津知教の妻奥山照子といふ者の。奉れる長歌。女の言は葉にしてハ。いとくすしくめづらしくて。よくこそはべり。さきにの宮にさぶらふ女官のうちに。これもきこえ。

宮城野は友まちわびて見わたせば萩の錦をたゝむとぞ見る
敦子

老つ目はくもりもせず宮城野は萩が花の錦なりけり
[illegible]子

こゝろなき萩の錦よりうつりし都の花も見るめかる
ありけり

かく雲の上人たちにもてはやされて人々にさへしらるゝいみじきめいぼくなりけり。

三十日天けよし。七時なりけり。宮城の佐藤三之助が亭をたゝせ。御輦(みくるま)ハ十二時ばかりの頃よ發(た)せおはしけり。鎮臺の兵士等が御よそほひ奉まるさま。迎へ奉りし時にかはらず。青

葉神社の山ゐ。小学のそこに四百人
ばかり。よそほひたそ。それが中に。帽めさんだそに。
師字と滅金してうちてが。あるうこえた。師範学
校のちうべし。七北田の橋づめる。生徒百人ばかり。
ちこみる。二十丁ばかり來て。右のくに門あり。い
ゆる山の寺なり。龍門山洞雲寺これなり。二三丁入
てゆきべ。山門ありて。うちあ四阿づくりの堂あり。側
られる開山堂いとめづし。二層乃樓なて柱扉鴨居
ちたこ彫物あり。この山い。應永七年に。祥山禪師

が開ける所。その後あまたうして。加賀の大乘寺の明
峰和尚中興せりとぞ。堂と方丈との間に橋このまり。
水いきづよく流れて。いと回るむきび。山よりに環て
て。翠にかくてあれ静かさ。東坡が盧山ゐ遊びて。溪声便
是廣長舌。山色豈非清淨身。といへるかくゐ所めさ
まりきんとおもふる。まこと珍い宝物おほしとき
て立よりしてぞ。たぐあゆき化石などぞ見れり
きされど暫しあそぶ。垢づける旅の衣を。かく清き境
にふるひたるを。いとれしくれん。こと出て。富谷

とをとゞ。午後一時ばかりに。吉岡よりつきぬ。このうまやの入口より。拜觀に出るをとゝ女。いとおほくたちさわぐ。まゝ小学の生徒も。千七八百人日章の旗たてくゝみゐたり。行在所のあるゞを遠藤某とかふ。ゝゝ人あり。めやの壁より。梅關が岳ゞきゝ竹のうけ物のゝ。古銅の花瓶にくさくの花をゆほくさゝてあるゝ。此わらはあてい。ゆまりめ所きぬゆあり。

七月一日曇りくとゝく雨ふる。吉岡をもゆく立ち山中のゝゝと三里半だゝゆ来て。三本木のうまやあり。

坊のうちに鳴瀬川といふ流ゆあり。ゝゝ休憩ひ蔣鈴木徳之助い。ふるき書畫のたぐひあまゝをとゝて。けふはたゝまゝ御座のうゝ乃壁より。池大雅乃詩のうけ物をゝゝ。そは外明清のゝゝ人らが加もるゆ。をゝ。あまゝゝゝせ峠ゆ。されど久しゝゝえとゞゆゝせゆゝねば。古川の行在所にさゝ出ゆ。ゝて。たゝきゆひぬ。きのふゝゝふゝゝづき。かく書畫よおほんめ代をゝきめひゝ車い。長きゝどの牧月ん旅ゆれどをゝく山ゝゝゝ。ゝゝより平地ゆ。田畠も

おほく。杉の[illegible]拜観ふ出る人もおほし。されどい
たくさびびて。宮城のこの結目うつしまそこよりおく
ゆきうるる。道乃うつくしうつり碑あり。節婦鈴木辰女が墓
へ乃道くるくるゆきり。顧問ハ杉宮内少輔と共ニ。墓の所
ふ立よりまぬ。九時ぞのうに古川につきぬ。こういま
ぞ陸前のうちなりり乃ぞ。これより陸中陸奥とぞゆ
このむほどいゆきるるけくあるれ。とたひゆう杉
に。坊の中に。緒絶の橋といふがありられぞのある
山ゆきたくえ乃橋ゆうるるあ ゆくうちのく末

ゆきるるき
この里いむう城ありて。大崎某といふ者乃家の子。
古川持慧ふいへるがきめり。豊臣太閤の小田原陣ニ。
主の大寄が遅参のこがゆて没収きまへ時。古川もさ
きうひて後。木村伊勢守領りるるれ。おのづうそのの
餘波ありて。今も賑きへる所きり。道のかうへ。志田
郡の第四大區の小學生ゆきて二千人あまり。学校の
ふぐ[illegible]てきうべて。ゆやくしくつうまりゆそう。女学
生いうとうくしく。きまめくのきが おほくて。ゆ

なるべきものなりと思ひなげづきぬさまにうり。
いうれきだ。和田うるとめの人どもいむまびうるうり。学生
らのかゝ数らん。とのゆゝくれん。らゝに諏訪社の祠
官は田中真功と以ふ者あり。行在は歌奉まり。これて
おのれがゆゝ紙ふるゝひまく
きよまぬ身いとゞくし安曇のゝちひろ行ゝ邦人
才人
といふ歌まめり。此翁の教へをうけて。外なる三人よ
りいよむものなるよりなり。節婦辰女がことを尋

ねに。真功家はかゝりて。ひとゝびの傳書をりて来
たり。これとゝるに。志田郡坂本村は鈴木八五郎とい
ふ者あり。娘と辰といふ。これは聟とむゝへく。字と八
太夫と名のゝせまり。以ろしゝ子とまうけて。夫婦の
ゆゝひ睦ましく暮しゝ数に。八太夫癩病はわゞひ
て。人まはあひがゝ敬きまはゝり数と。男八五郎い
たく嫌ひにくゝ。聟と去るべくまばく辰よいひ諭
をゞる。辰貞節と守りて。更に父の言をきの沓。かくひ
とゝび夫婦とゝりて。子さへいで来る中と。病ひの

為ゑ離縁て。女の道たちめハ父の
仰せ背きぢ。え諾ひ侍らじ。とてもの後いよ
くねもころ。夫の病をなぐさめ。それより八五
郎。ますく聟を厭ひ。さまくの事構へるさまなり。辰うら
ぐひ知りて。かくまで父君の。夫をいとひ給ふを。あら
ぬ。ほゑ過さんも不孝なれば。妾ハ八太夫とともに。
居を別ふをべしといひけく。近きなりなる嬬屋とう
つて移りけり。八五郎さてなほ八太夫。わの
為のひとり娘と。いうぞう白癩なるを結ばしめて

ゑ。ハたちまち。きとひるまる思ひたのりを。ついゐ心ゑと
つの悪計をかまうゐ出し。ある夜八太夫がまなる隣
乃家ゑ忍ひ入り。ひそかの米を一俵ばかり出て。わきて
そなた米粒と。八太夫が家の門まで。ばらしつゐおて。ぬ
きもかへまるさまなりけり。つとめて。隣の家ある
し。米粒のおちこぼれたるを證ゑ。訴へ出るに。父八
五郎よりも。そなた盗人ハ聟八太夫なる事疑ひ侍らじ。
とまうし出さりしくば。ゆゑて郡代より。八太夫を捕
へ。えんくられと鞠問せ。そのつま辰をもめて。事の

ようと尋ねるるゆ。辰白洲ようづくまりて。はくぐお
ゝへ新坊う。父のいへるがまことなりとまをさば。夫
をゝて寃枉の罪みあらば。夫ようさる事なりと云
を。父をゝて反坐乃科をうけしむかゝるうれ瀬コた
ちぬるうゝを。こをゝをゝのだんをべをつゝど命をを
てわん後みこを。事あきゝうにありぬべきれと心を
決め。せをゝく家人をゝぶみわうれゆ盃ゝかをさん。と
家に帰りを。僕と酒店ふはをゝをりるゝ。そゆをりゝ
のきぶ帰りるゝ白洲ふめゝ出さて

ようまて。村長の下でのきゆ入来りを也。辰をゝをゝ
をゆうしが。つとたらを。暫くまゝせたまゝと云ひ
ゆれ。奥のひと間みいりにをを。下つのきい。衣ををゆ
改むるゆべゝとゆりひを。をゝに尻をけるゝりゝ
が。にのまりひきゝくまゝるをいづゝをを。をゆく出
らきゝを声をゆしこのど。答へれし。あゆゝをく障子を
もゝけど。こゝいうを。懐劔りを幼女を刺し殺し。自ら
も咽をかきゝをを死みゝり。これ正保四をを年四月
十四日のをゆりをぞ。下司いをく驚き。をせこゝりて。

そのよし村長につぐ。村長より郡代にまをして。委しく尋ね探らせしに父が誣罔あるまじきなり。されど辰女が貞節を守りて命を棄ざりしもして。八五郎は反坐とする物用をうまじ。また八太夫が身もこころ付くて。病ひ乃床みめらるひつてこと。齢をかぞへてみまうまじ。今ハ百年の昔ものがたりなり。その つゝ書よむうちにて。眼きり。涙こぼしまで章を尽してよろこばえをぬい。辰が孝貞の真實人の心を感げ動こしめそかりけん。

徳大寺實則

東久世通禧

きるを川ぞいづくて後の世りこのくちぬ名を残ずの形の形

きるを川原のぬれ衣ぬぎの絞て泡と消ます人を

この歌しき

きゝ同じ郡の大柿村ハ。豊島友藏といふ民あり。うち八太夫が病ひにわづらひて。目さえぬ時ハ家の業を。妻ときよ。つきこのことを厭ふるおもちい

なく。朝夕のおきふし始め。ところも著物くふ事ゐ至るまで。いとねもごろよあつこのひろめ。されど友藏。長き病ひにおのづから心もひがみて。おのゝ思ふにゝなるそねとろへ。腹そとゝあらぬおて罵りさていうちきさめれどゝ色ど。とみよきにこれとうきくぢ。つねに笑ゐほとなりて。とゐつまかくゐつけ。夫を慰えいたりつ。いよく中むつまじく暮るに。とみよゐの親のかたより。さるほき病ひある人よそひるそへ。血統の汚きよさ人なりて。一族の恥とれゐまさ

きる事あらじ。とく離縁さうへ彩屋。とたびくいひおくれゐ。とゝよきにうものひくゐ。妾友藏の法ゐとれりしよう。おやうさまるぬ愛とうけたり。さる式夫病ひゐ罹きりとて。いつのぢこれと見棄て。女のゝち立ゆるゝき。されども血統をけゐて。うきまゝ家に瑕づきんるへ。妾とそとろとく思ひ侍らねど。りふより人ゝと。まゐたりとゝ侍るまで。妾とゐ无き者とおのひたうゐまて。ひきりて。親族のうさい更ゐおいきゐ。おやの家にゐたちいてざりるゐ。されど

しぞくもそなはり貞節みやび感げりん。ものもなきまつよ。猶友藏が家にいたりつかしたりまりとぞ。友藏もそもそもおもひて郡大嶺村のうまれみて。ものもなきほどに。かしらより養子みもらりて來まる者まりしのぞ。此病ひを得しよまい。おやもちろうらみ面ぶきみやおもそもんと。大嶺のうとみい行うひをせぐ。夫婦なぐう心ぞを。のめづしき者にまるん。戸長田中政右衛門。かくる貞婦とおほゆあみまをきぞうつておるも。わづあやまりまり。とうみよこの身の上。委しく出うして奉りけ

出ぞ。出とうの七月。縣令宮城時亮。いうく感ぐて。賞金一圓五十錢つのうう。行狀を掲示場みかくまおり。然るにある日。うみよ戸長ぐを行て。賞金うのうりしよろとびなどねもろろふのぐ。さていふやう。そうび掲示場みを妾がみ書うけめるゆあよ夫のなしき病ひ世に顯はれ。妾ゆゑよ。夫いうぐき恥をうけ侍り。夫この病をうまりしより。十年がほど。ひるよる心を盡して。人をきぐ。うちくみううめなるのひ侍らんとそもおもひ侍りしが。今いそなはり甲斐も侍らぐ。いこのぐ掲示場の

事書をだす。こりのきのあらまてのこと涙をのこれたち
ひとをいむこと。その事のまことと面ゐ顕されて。げよさお
そるゝもこゝろなれだ。うれが心を安くさせんやうて。
區長ここのこゝひ。ねのひの如くこりのけきをまり。な
ほ色八太夫も辰藏も。わかく郡の人まして。わるゞ病
ひを得。辰もこゝみよる。きゝ病ひある夫につうく。共
にみをゝ改めざる。そは時とそさをれぐちおくれて。
年百とをも屋だくまくを色。錫類のゝるゝまきくて。
わゝまるるもまるめゝゝき事をゝびや。おのれこぞ

よる。明治孝節録といふ書うれゝこど。こをもふこりを
だをゝゝこのび。いまを詳らかみをて に記をりたん。
およひ小学の生徒ら。螢とおほくこりて。行在の庭ゐ
をれちいを色る。いこり旅のおほんつを色くをれぐき
をゐひりん。

敬直

うれゐこのあるをそまるぶいこるきゐ をぐほ
をるりこをゐまるゐ
二日ゝるを。古川を七時ころゐをちぬ。天平のむろ

黄金の出たりしと云ふ小田郡に。其の東の方なるべし。今は其郡に遠田と登米との二郡あるを
られたるうち。遠田の方に。式内黄金山神社あり。石
牧の沖なる金花山より黄金の出るより云ふるに誤あ
り。と吉良義風と云ふ者。其ちかくの名所ども委しく
たづねかうかんてつゆ。萬葉集に小田なる山とよ
めるあり。とよめ歌みよれば。其説なるべし此わ
ゝ田なる所なれて。つゆ廣くてなべし。苗の葉乃
ながく中み。男なれ三百人ばかりもなりなん欲と

おもふ。白きなぬぐひをかゝぶり。赤きなすきを
うきて。草ゝりなり。これむぢみ水沫なる。向股み
ひだりこかきよきて。汗もしらでにつらむる労を
世奉らむとて。殊更みのなるひ出たるべし。
御輦のうちより。民の疾苦むきまを。いうまあれと
ゝゝれたりん。そゝを。新緒川をわたれば。まゝ
五大區の生徒二千人ばかり。一校ゝに赤ゝの幟
たゝて。正しくなるべし。狐塚を一ゝ。宮城と磐井と
乃境あり。とゝを左へゆゝ入て。東鑑なるたくも槁のあ

とゐりさぶ。さるべき今の道い。後よひらきなるなるべし。りふいとりく雨もふれど。とちとち村々より。十里二十里の遠きもいとまぞ。御輦とがまんとて出来たる男とさ。いとわ目るるいとわ。野廣く山高こうで。うちひらきなる所あるぞ。集ふりたりよりよしらてれるべし。九時はうりに荒谷を過さきぬ。数み。松の並木の陰み。まる六大區の生徒二千人ぞうなるるるり。高清水とあわさよ出るべ。廣き野ありて芝生さぶの茵をときなるべたるが如く。いと清ら

なる屢なり。里人らわるひて。野立のわんうる月をかまへたり。十一時ごろよ御輦ってのきたまひぬ。うねてさぶめさせぬるり御憩ひ所なるねど。たちよりを給もんもいうぶあるんまど。供奉の人くのうちにまをせるもるること。さんぶみ里人らがいるはなるる志と。むるくゆとているをぬる。これ野みいとあまる。駒とたちをせ奉るるよ。青と栗毛とにあるん目のこまるぶがあるるうぶ。買せ給ひて。いまぶ雑るるれバとく。飼料いるるて。牧るあ

づまさきをあるく。いとゞき馬主のめはぼくなりなり。
そこをたゝせをひて。田沢村の力石といふ處よりて
うをあるく。こゝハ石牧あるよりよりなれ東のうとりを
山。黛か如くまく。そのふとまぐ。野原ひろくはぐき。
北西ハめぐりて。南部の山ゝつらなり。出羽の境まで
は。はるかにゝゆゝるゝ所なりしもゞ。いとひきくく
ゞまりをあるく。ねのれい十一時ばかりを築館よ
はなれ。ふハねかゝる坂のゝりしゞ。中よ高清水と
築館とゝ間殊よ道あしゝと。所の者乃いふまゝり。車夫

をひとり雇ひませり。されど坂路にてとそあまと。いと
ふまきのれる真砂まて。石むらゞみなれがひきれ
ゆゝハせざりあり
三日雨ふる。七時なのりを築館をゝり。磐井ゆで坂路
ゝをなれなゝく。腰輿にめさをあるゝ。ねのまゝもまゝ
車夫ひゝりきぬ。そよを駒形山雲がくれて。左のゝ
たるゝゆ。沢邊と過て十一町も来ゝる所と。梨崎村
といふ。姉葉の松ありとゝて。たゞぬまゞ。その木と
きて。いふ人もを。雨さへいとゞくふれば。むて

ちひさきぬひどる

彩人ちよとゆきてまかくるまゝ婦紫の松い人な
られくに

らよめるにちとわてひとて過ぬ。平方村の道乃かてへり。
泰衡の首塚あり。金成につく。こゝに小学の生徒千七
八百人ぞのりなをみるこゝろ。その中ゐ男兒（とのこ）い洋服なる
ごおほく。少女もあり袖袴なをまめうしくまをひ
なり。むゝとおりくバ。伊勢物語ゐ。くりもちやあね

もは松の人まゝいをゆとのつとういきと以をまゝ
をとよめ歌ゐ。松を女ゐみまをくて。人めのくい都ゐ
ゐみてうてんゐのをといへるなり。さる城かくをゐ
ゐもづうきぞりをは。をのとうをちるがおほ
きゝ。開ちゆく御代の恵を露ゐ。おひ出しをれく
しどゐをれぞれる。でて。むるをちをぶるやど城。高楠
徳兵衛といひて。廣き家ゐるほうねど。上の間ゐ机一
脚。倚子二脚をのまゝ。白き表敷（そき）して。顧問とおのれと
の為ゐ設けなり。次の間に机一脚倚子四脚をおきて。

おもうを敷をし。従者の座ぞをり。いときよらみを
ゆひの形。さるを宮城盛岡をぐゆうの所みてへ。い
ひつづきはどれるをもしねご。かくる行ほうり乃山
中をそ。なるぐの心尽し見をぐされねば。記せる形り
その家乃柱に。八重女といぶをもてたよざくひとむ
らあしたり。おを田中彦兵衛といふ者の母をて。六十
なまりの嫗をるが。わのき時より歌をねをて。身の行
ひもいとよれ者をり。こをあるぐいふ。なびもえまり
をれど。いそぐ道をれば。むれしぐをぐぬ。うまゆを田

村万呂の。大同二年に建しと以ふ観音堂あり。むの
此人乃蝦夷をうちしをた。栗原郡のうちにく軍をを
の一所と。後ゐ営岡と名つをしをうをり。源頼義の
安倍貞任らを滅しをとり。そをより以ぐたちをを
ど。こゆ形る要害の地をるべくそへゐほをうをこのわ
たりゐゐと思ひて。里人ゐを人ど。をを里る人をし。有壁
のうち。何をの以ふたうげゐ。陸前と陸中との境あり。
陸中い磐手縣のつのきどる所をれば。縣官ぞを出て
待むを人奉をり。ををうをををしたぞの末て。十万坂

ごとく嶮しき坂ありしを。そこをのぼりたる道をたどりつゝ行くこゝろもち。

みゆきすゝむ民のこゝろをとゝのへて岩倉具視

しるべしるきくん

金井之恭

店月鶏聲過幾朝。千峯萬岳路迢〻。請看東奥山程嶮。

九十九回十四槁。

真柴村の的場といふ處に。御いでゝ所をこのまゝて。駒

が嶽より雪をそゝぐびゝりて来て奉る。供奉の人〻も。皆口にふくゝて。あつさ忘けちり。午後一時ゐ磐井

ふつきぬ。こゝいゝと一の關といひし所なりしと。維新の後。磐井と改めらるゝ。磐井郡のうちまれびな

る。坊は入らんとする所ゐ。小学生千二百人ばかりつ

らなりゐる。さまこのちいなゝ。ぬいゐと伊達

家の族田村氏のゝ里なるゆゑ。ぢちも長く。戸も

おほくて。賑ゝ。所なれ。ばかりし。されといふも

せん。去年い水。こゝ小火のわざをひありて。民られ

ちらゞくるゝ。さるにより。まゞ家もはくり畢へ
ぬ所ゞちなれど。たゞめ行幸おつのうまゝで
ゆくと人〻きそひさまて。まゝひなゞ〻ゆくしゝ
だからゞて。ゆゞをめゝゆうにいまりみるとと
ぞ。特こゞ中おい。日ごとにたゝひ草をとおつくぬ
るもお用うるよ。恐らく開しめして。金千圓賑ゝ
めゝ。とゝれるおほん恵をたまゝばや。おそれしゝ度
このわゞひにあむゝゞ。縣令のゝちびきやいる
ゞらゞきゝん。教化の旨をわきまへて。物学ひまもカ

いきゝわゞゝゝおく。かゝにゝるせる如く。学生もいと
おほうるい。いゝゝゝゝゝゝゝゝ事まれん。とに岩井川と
て。長き橋わゝせる川あり。とれをとい酸川のゞまゝ
いちるの清水より以ゞ。この橋ふるくい。萩萩橋とい
ひて。道より左のうゝ。黒沢村のあゝりにゝりしと。萬
治年中おゝ今乃所まゝうきりと以へゞ。萩萩といふい。
川の北に萩の庄。川の南おゝ萩の庄なるにようまる名お
ゞとれん。おゝゝおゝ陸奥話記お。萩馬場と以ふゞゆゝ。
ちまゝ萩の庄ゝゝそ。その萩よりあゝひようまて。萩の庄乃

4
56

名をも。後ふつけうるがゆゑ。とも萩の馬場ハ下黒沢のうちに高梨と申ふ所ありそこなりとぞ。このわたり近くて小松の柵なり。さらに安倍宗任。彼の叔父良照法師なども。ことうわたりと。頼義攻ものとけ。こゝひ近きなる里の黄梅村と申ふあり。ものとも仙臺の士族三好清徳といふ者の出あるを。行在所あめして。父の誠忠を深く感げさせあふよう。仰下されなり。さるハ此者の父監物。過ぬる成申のとしに。おほ地ものあはれんとあふ。腹きりてうをされば。なるなり

十洲記 畫

東京圖書館

類	屬	函	架	号	冊
		四	二	五六	四

東京帝国大学附属図書館蔵書印

苻の菅薦卷四

近藤芳樹

そのほ曇まり。けふハ中尊寺みたちよりをめぐん
らて。朝とく御輦を引いでぬ物のれいこゝに曉ふこの
くゆどりとゝち。山目を過て。一里ばかりゆき来つゝ
むとおもふ間どゝ。北上川北より南ゆきのれ。衣川西
よりの東ゆ流まて。濃ふ所ゆ来きて。そこ行る丘ゆ高館
ゆとゝ行り。のゝりてそゝわつゝ世ゞ。東稲の嶺遠く聳え
て。東山そゝ行ゆとゝの如くひゆく引まへ。むこう

安倍頼時が。千ゐと云櫻とうゑ給ふといふ。なるべし。然るに頼時が亡びしより後い。春どもの盛となる。なる人なくて。いたづらに咲ちるとうんと藤原清衡が平泉ゐうつりすましよる。此わうり。まこと時めく所となりて。秀衡ゐ至り義經とともに住給ひけ。西行の東大寺再建の沙金とりゆめゐとて。秀衡ハ親族のちぎりあれバ。くだり来て。暫らくこゞまり。歌よめりし中ゐ。たそかれ山のきゝ花と以ふゐ山家集ゐ出ゝるをおもひ出べし。猶そのほどまでゐきゝ

おもひこうきんう。丘のうへゐ御ちひさき堂あり。中央の上壇ゐ。義經の甲冑きゝる像とおもう。下壇の左右に。秀衡泰衡の烏帽子直垂の像をわけて。共ゐ塑像ゐる式。近きゝゐど修理しつゝろひて。古色をうしなわず。當時の書とゝを見るゐ。秀衡ゝゝゝんゐ世ゝ時。泰衡ゐ言を遺しゝて。義經にかゝづきはうふつきよゝ訓置つる式。頼朝の勢ひゐおされて。つひゐ義經にそむきるゝ記しゝたれどゐ。あれよゝく事情をかんゐふるゐ。義經自殺せりゝいへるハ。鎌倉とたゝかのれるゐ

て。まことも杉目行信といふ者。そは面の似うるをもく。身代はまこと。義經をば蝦夷のうちにおもひたり。といふ爲る心正しからん。されば。とて頼朝。あやぶ疑ひて。またふたゝび軍を起し。泰衡をほろぼすべき。とれ泰衡の。義經をたすけまゐらせしにくみたり。そもく義經。の。たゞ〳〵ゐて。泰衡と心を戮せ。鎌倉に仇せんかい。頼朝の建たりし業も。いかにかたぶろこんもはかり難し。さは頼朝。おそるべきかゝきと思へばとそ。そづうゝ大將これりて向ひたりしぞの。東鑑によるり。

文治五年八月廿一日。頼朝栗原郡のはくも搞に至らまゐに。集へる兵二十八万四千餘騎。とあり。かく天乃下を動して催されたるも。義經泰衡心を合をて待むうゝむ事と。かうゝ光ちまてるゆゑなり。されどゝ結軍をもて攻まゐらんにい。泰衡もいこのぢう堪ふべき。かゝて和をゝを泰衡い。はゝらい義經の忠臣なりきを。

まよゝて ふゝと たのむぞあやまれる 弘 そ ゝ
いのちを ちらす 色

まことその堂乃うちゐ。義家の木像ゐり。こいつちひ
さきれど。むこう結まちり。去結堂りとい猶狭うま
と。天和二年ゑ伊達綱村。今の如く改めたてまきう
らぞ。

木戸孝允

ほうそひ〜むこう結ゐ衣川波たつぬ世ときと
ちまうれ

徳大寺實則

衣川むこうと思ゑ袖の上ゆまちり自結うまぞ

ゆどを歌。

東久世通禧

老樹参天繞古城。誰憐兄弟闘牆情。斜陽影淡衣川水。
猶帯流離鳴咽聲

杉　孫七郎

判官館北是衣川。憶起豆萁相煮年。遺跡秪今何所見。
鵲鴿鳴度古原邊。

宝物とて陳列しものにい。とれをりとおほゆるま
ま。たぐ紺紙金泥乃経二三巻。ゆをふるくゆ。こい

中尊寺よりわのち出るるなべし。四辻公説の怡志と以ふ銘つきらし笛も世ふるし。義經の冑とて鉄の朽ち損ねる鉢あれども。當時の世ちなるねべうちうづ。堂の溜乃下に。鐵の燈籠乃軸の如きものありて。年号を鐫りたるい。塩釜社なる泉三郎がのといとよく似うう。うつおりる圖本いまとてにるきんちうてたづぬるど。いこのりたぶまん。ええべくちとう。とうくたるほどふ。御輦つうをめひて。のぼうをぬひうべ。おのれへいそだおりて。平泉のさて

ゆくく。車とうふうて。かうことにとぶ名つうてうふ。清衡より恭衡ふ至るまで。代々世ありりんも。ことわりなる要害の地なて。大ふを表ふ名くを。高山うろふつうれり。たてとりうんにい。をふよ紀城なり。きて衣の關乃跡とうく。中尊寺ふいうりぬ。とは寺。山号を關山といへるん衣關り近き我以てれり。ふりゆうふ地藏院とて。あり。ゆう上りて本坊ふいまべ。佛殿に寶物を陳列たり。まづ十界宝塔の曼陀羅とうる。その宝塔ふ。最勝王經を金字ないとうまのにうり。

二幅なると。表黒漆内金泥の。高七尺余幅二尺五寸ぞ
なる社龕にをさめたり。また清衡の金銀泥基
衡の紺紙金泥の一切經へ。おほくの年をふるを。その
をれるへきをれをれど。秀衡のをさめ宋板一切経
へ。今も有り十九櫃あり。また秀衡ぞめりしといふ
黒漆金蒔繪の筆乃軸へ文人らが欲しがりんさぬし
なるものなり。また義經の畫像。紗の直綴の如きもの
と著なり。また弁慶の塑像。甲をきて頭ぬ末額せり。ま
た安倍乃貞任の鞍鐙とて。輪由木なるが朽るぶ行

る。前輪ぬ手形のつれるへ。その頃既ぬ朽ぬりに
や。また事知なる人ぬなるべし。また亀井六郎片岡
八郎の笈とてなり。これ外太刀などあまたなりつる
ど。なぞ おのれが目のつれるものゝを載せり。ま
たふるれ棟札あり。相摸守貞時。前武藏守宣時の名を
署して。上ぬ。依征夷将軍二品親王仰大歳戊子初冬日
云々とゆ。その戊子へ正應元年なるべ。泰衡
の亡びしより。百年ぞのち後なり。また猶鎌倉より。
かく修理なるどとて。舊跡をのこさんこをのり

ごとしと以てす。此寺の何を果なんいあるべしとまでいいらじく美麗しかりしほど我知ぬべし。まづ鎮守府大将軍顕家のうつされし。清衡が中尊寺建立供養の願文ありて。天治三年三月廿四日。弟子正六位上藤原朝臣清衡。と記せり。七百五十年の古へ乃物なれば。清衡がとそえん本書いらるにそなねば。うせとて惜むべきなりねど。さぞ南朝の忠臣まて おもし 顕家卿の。件願文者右京大夫敦光朝臣草之。中納言朝隆卿書之。而有不慮之事。及紛失之儀。為擬正

文。忽染疎毫耳。鎮守大将軍と奥書して二合をそ忘たまふるふでの跡をそ。誰かいたるとそざらん中こゝ寫本乃かとそめでされと顧問まかそひて。うつくしく盛岡までたづさつて。まづ金色堂と以つるあり。金銀のうぎりに光りかゝやくゆゑをづきうと。所の者いひうを堂といつり。上壇ま弥陀の像をおき。中壇に清衡基衡秀衡の棺あり。そもく此寺ハ。仁明天皇の嘉祥三年に。慈覚法師が開創めて所なりて。その後衰へたりと。藤原清衡。むこの乃基礎によりて

改めつくまるなり。清衡は權大夫經清といふ者乃子なり。武衡家衡の謀反しとて。源義家に隨ひて功あるにより。鎮守府將軍になるまり。その子基衡。その子秀衡なり。およそ三代九十四年の間。平泉にをりて。奥羽のうち國を領り掌わり。さるまゝに家富み栄えて。中尊寺の造營はもとづるべし。されば東鑑に載せし所。堂塔四十餘宇。禪房五百餘宇。ことごとまの國〻乃うちにあり。まさにびなれ所なり。さるいそれ結搆も等閑のるなりしほどい。〻に載を

なる光堂。いとく。大江なるにはねど。柱鴨居なども。螺鈿あて。扉兼塵なりきゆうなるもの。とぐね銀をのべなりぎあうる。日光よりも心を用みる事とまるれまぐ。これとりて外に物しなるを知られなり

岩倉具視

ちはやの乃種なるものまうるなるをいとでるす
きぞめ つのまゝ人
とゝ〻こゝめぐる目まどひに。物の色い歌よむ事を
も わまるまゝ〻ゝるぞ。國破て山河在城春草木深とゝ

ひさて。立出んとするあ。法師ら猿ごうわざして。天覽あ備へんといふめづらしき事なれば。まづ御輦と らづ見させあへ。いとよき舞臺ありて。竹生島とま つる。仕手服とはずめ。笛鼓地謡などそれ法師なり。仕手服ハさるこがあかづらをつけて。そのうへに烏帽を着なり。法師のかるわざなるい。僧尼令あ禁めの つる。いかにぞあ思なれど。今い妻帯の地あて。いそ

ゆる火宅僧なれど。咎むづきにあらずかし。まこと也 や安倍貞任が。こゝとしゝ糸のそぐれのくるゝさあ とよめる。衣の柵をとは平泉なるべくおりひしにと ハ、二里ばかりも川上のうるにて。今いかゞ城とい ふ所なりと以へる人あり。されどいつゞあらん。そち のく人乃らせなりて。いさゝか名のよきれどなまだ。 ゆゝぬ所とも引つまて。このくいさまほゝゞること おゝし。おりへにあべが城なそのなごひまやあらん。 さて寺よりらづらせあひて。御輦といそのを。水沢あ

つこの世のものゝ。うまれのの入口に。小学生ら。男をとゝあを
わこのらて。をゝみてる。いとおほうりき。中尊寺にて時
とをぐしこのび。前沢の東なる不動堂みえたちまゝ
ざをり。その堂乃境内み。いとふるきけやき乃木み
ゐて。朽のこまり。根のわゝり一丈みず。その蘖のさ
しわゝり みてる。三尺ばかりあまり。をを樹の。山みづ
こめゝち枯くの攀れ。とほくせゝがこれをりと聞
老志みえゝれど。此句奥の細道なるものをゝねど
以ぶこゝ。此わゝりまをる南なあゝりて。駒形山ゝゆ。式

内駒形神社のをづまり。まを山なり。所の者い駒ゲ嶽
と以ふ。夫木集みくりこまゝ行るこれをるべし。さこの
しく高き山みて。西ハ出羽に跨る。北ハ和賀ゝ接り。東
ハ膳沢ゝ及べり。水沢ハ。ゝをゝ仙臺の家老伊達
将監といへる者の領をる所なて。その将監ゲ家人の
宅をゆどりに構へゝり。将監ハ宮城みををまべ。家人
をゝれ帰農して。このあゝりにこでまりあるよゝ
る。廣こゝぬゝちをゝ顧問のあゝるゝかゝい書院
めて。床ちどゝ棚。おのゝ方ゝ床袋棚をどありて。い

とよくしたり。ふ岩井より水沢まで。所〻ゝ小学生のいでるる。千二三百人ありしとぞ。

五日雨ふる。水沢とたちて坪〻来て。宇佐村といふ處に。鎮守府八幡宮とそあるに。顧問とるにまうで。祠官とよび出てたづぬる也ぞ。證とれるゝきものいひとつも有

いまゝへ乃ちまたちそそのほとゝへべ小田のあぜ
たるつまを也たるそのれ

敬直

されど東ふ北上川。北よ膳沢川まそのれて。要害の地なるゝに。延暦二十一年に。坂上田村麻呂をして。こゝに城を築しをゝ。膳沢城とれたり。さるハ北上を東よりて。下膳沢ゝいふ郷今もあれど。この鎮守府の所が。上膳沢たるゝ也。弘仁三年よ。城を廢め。府と置て。鎮守府と跡けしよる。おのづゝ膳沢の名ハかゝる也たるゝ。仙臺のたるゝでしそのいふ者の。安永七年ゐ建たる碑あれど。こゝ八幡宮ハ。田村麻呂の祀まるよしあるゝ。城と府ゝのゝに及ぞ。

おりゝに八幡大神の山城の鳩嶺にうつりをゝるい。
貞観元年にて。この時よりして。世の中ゐ。此神のをい
づを廣くなりゝをもゝ。田村麻呂い弘仁二年に薨
らせられゞ。この神の。大神をゝに祀らるゝ理
いをゝめれし。東鑑にしるいる。里の老どもの言
をゝをゝゞひて。古しへを深く勘へざる乃ゐゐまりゐ
るを。碑をゝて事を傳へむ人の。かゝゐぞうに記す
べきういを思ふ。つまをゝきをゝまて。
あゞれのはゐゞをゝゐ上の測にくゝゐて沈め

てゝゞれ
をよめる後宮城人ゐきををいのゞいをん。まゝて
乃事を吉良義風ゞ以へるい府のあとい抑ゝまへの
かゝ。前沢と水沢とゐ間をる古城村の八幡宮とて。い
と美麗しく宮のなる所より。戌亥にあるりて。字方八
町と称ふ村あて。をゝをゝゞ宇佐村ゐいゐゞゞをい
をゝ。いゝ迄をゝん。定めゞゝ。かくて膳沢川をと
たり金ケ崎ををゝれゞ小坂あり。北ゐい和賀川のを
ゞをゝて。みえて。おりゝろうるゞき所をれど。雨にをゝ

ひとつのひなり。相去と生死。鬼柳ふ至る。こゝより南を
膳沢郡。北を和賀郡といふ。天正十九年ふ浅野長政。九
戸の討手のさたもあてうち入しときこゝに所をて。膳
沢和賀の境をこゝに。里人そハ瘤木をて。はるかゝ
ゝとなりといむしをて。そこふ立ふらんもむゆくふ
ア。こゝと境ふせんとをて。勝示を今の所ふ建きをて。
和賀川の長橋欄干ふあてくくるをて。十時ぞのを
に黒沢尻ふつきぬ。こゝにもむゝ黒沢尻五郎正任
とをてをたりしが。其城頼義にせ免落されり。それ

ふを三里をのゝ来て。豊沢川ふを。土橋をぐ。これも
欄干ふてくくしくでいと長しわを色を花巻ふり。をゝい
りと鳥谷の城と以ふを。ふそ城のほとに。鳥谷神社と
て村社ふり。然るに浅野長政九戸を鎮免て帰りの間
ア。時南部信直とかゝひてそ家人北秀愛に守
らしめき此時花巻と改めたりとぞ。ふ此城を
剏て築しハ。安倍頼時なるべし。頼時江刺膳沢和賀神
貫斯波磐手の六郡と領ありしのち此所が中央ふれ
を。城と構へ四方の指揮し。長子貞任と。栗谷川の柵に

さまをして奥の蝦夷を防き五男正任をを黒沢尻に和。きて。南のかたり備つたりとおもはる。されどまた衣川ハ六郡の南乃さ〜まぐ。防くみよ所をれを。頼時おほゆうよそむきてよりハ。常にそこみのそなさすけんと。衣の館乃ゆぶまより後。鳥谷ふ引しまぞまるるる。陸奥話記その外乃書を勘ふるに。天喜五年九月ふ頼時鳥海まて死ま〜後ふ。貞任も衣の館を棄て鳥海に退きをまより厨川に逃こもまるよに記をれと。鳥海ハ。衣の館よりハいまく東のかたな

まつべ。おのくう領ける六郡の中央なる鳥谷をおきて。鳥海ふゆくべきふあらば。また鳥海より厨川までハ。そるるに隔りたれば。鳥谷ふたちもまでたぐちり厨川ふ逃退くべきまあらば。それを鳥海とあるハを。なお鳥谷の誤なり。とみちのく人のいへる説のなるが。さもゆとおもまるまる。抑鳥谷を頼義乃かくまけんさまと思ふふ。鎮守府までおひ來て。そこにかりの館をこのまへ。今十二丁目と呼ふ所ふ。兵を出せるより。里人のつたへあり。十二丁目ハ。花巻より川を隔て。二

十丁ばかり南にあり。されば花巻がもとの城は鳥谷にて。安倍氏の居所なるゆゑ也。後までも鳥谷の城乃字は傳はりしと。上件に〻数如く。天正の花巻とは改めたるなれども。名の義は。北上の水のほとり〻数櫻は花の。こゝなる愛宕乃下といふ所にて。春ごとの渦まくをもてつたへたりとぞ。こよひ

ゆめぐくかたるあるじをこゝろひて旅の袖のぬれにけりなり

藤波言忠

六日も猶雨ふる。御輦を拜むとて。そこなる紙はり免。学生など。ぬれ足にぐつ立てゝ。おほんこゝの人〻も。旅とゝもの袖しぼりもはねど。こゝより北ハ道平らにのみて。車は輪も泥に粘うで。九時その宮に郡山に出うぬ。晝食のとき鯉あり。此わたり海こゝ紅処にて。かく川魚を用ゐるなりけり。一里ばかり來て高水寺村といふ。頼朝の國にはいり入し時。高水寺の衆徒十六人。うちく事せしことあり。これにて大地あり〻ほど殺知るべし。今かゝで一宇の茅乃菴。そのなごり

とらぐ。郡山より盛岡まぐ。松の並木乃下道ゐて。陰いと清し。雨ふらばいかり旅乃おもひもれぬべき。十二時にまうんとするほど。盛岡ゐいりぬ。町の口に北上川ながれたり。中島ありて。ふたつ橋かゝまり。欄干と青漆ゐぬりていとうるはし。川の幅九十間ばかりあり。名を明治橋とぞいふ。あとゝい船橋なりしを。明治七年ゐ。かく改め架せりとぞ。右の牧乃ながれとより。この橋ばかりとまで五十里あり。船かよふよしあて。盛岡の賑ひまさるゐ。此川なるによりてなりけ

る。ありきいたる者にひとりまてゆどりゐ至る。あるゞを村井弥之助といふ。ちゝよ西のかたに岩手山ゑゆ。まゝ名い岩鷲山ゑいふり。おもて七里ちのり隔りたり。この山。雲霧のたゝぎまひによりて。かゝち布自の根ばおゝ。故に奥の布自とゐふ名もあり。厨川の古城乃ありとそばふりと近くのこと。里人小本村司云。岩手を中むゝ音讀まゝてグワンシュといひ。浮屠氏佛をいろきて。霊鷲ゐなぞらへ。岩鷲とそのばしより。いろはくいたわゝを唱ふるゆゑに

たのまつど。まことい岩手山なるゆゑあ。維新の後。岩手神社の社号によりて。りとなを名ヨかへまり。とゝ以へを。主上あへ行在ヨつこをめひて。晝の御饌めゝあぎらを。それたち学校ヨ臨まをめゝり。とゝにハ九校ありて。生徒千五百人。それが中に四百人ぞりへ。そをめなり。その男ををめこゝ。これ書たづさへくゆれうふとををて

岩倉具視

たまがこをなみちのおくまでをゝ茅ひゝぎれかゝてををより養蠶をする處。中津川の水をのをて糸製る処。機ある處などの。勧業場のうちにかまへたるり。行幸ありまゝ産物をつゝねゝ処もなりて。種こめるのども出せるを。をそれたゝなどゝてかゝをめを。

七日晴ゝり。ゆふいちゝにぞまゝをめゝり。中尊寺ヨり加賀來ゝ。顯家卿のゝれゝ清衡の願文をゝうつゝてゝををを

だもつまぬるのなき

後の学りきてるをぬ筆弘路見てる浦し安倍殿の裔
をてぞふる
主上ハまさ午後二時だのうよる。行在と出さをぬひ。
町の辰巳のこのれる八幡宮の社務所ま行幸ありて。
牧馬をえめ〻ま。厨川村の清吉といふ八十とこえる
る翁。いかされみくつづにそひて。いをゆる馬子
歌をうたひなこの。御前を引うり。そのりをま五色の
布りてこのざまる駒をひきり。これみつぎきく四五百
頭ま者てぐひ過ぬり。さて後。りを藩主南部家ま佐

れたまる軍馬の曲乗と。士族の者ぐ〻つのうまれ
ま〻とぞ。ふいその所みまるさりしうぞ。後にきて
て記せ新まり。あのれいまぐ三時だのうより。吟香と
共ま〻かと見みゆく。中津川いりを城の外郭
をめぐまり。されみかまる槁一間ごゆに銅乃葱柱
なり縣令島惟精の家ま至る。林泉いとよ。出てうと
にいる勧業場をえめぐりぬ。に狼の子ひとつ
繋ぎたり。さるいを縣い馬牧のおほうる屢なるに。
年〻おそうまる嚙を殺さるる駒。いとあまる多を

憂へて。縣廳より令を狼を捕へ殺したらん者へ。賞金あるべきなどあり。これより世の憂へ大きなるあり。これ狼の子も。さるをりにとらへしものなりとぞ。さて廳のまへを過ぎみ。高七八尺。長二丈ばかりなる。幅八九尺もあらんとおぼゆる大巖のうへに。櫻ひと本おひたるがあり。いと大きなる木なれど。根のめぐり五尺あまりもある事。根より二尺ばかりなるまでに。えだ葉繁りたり。土も多く石のうへなるゆへ。いかでおひ出ぬらんと思ひ

ゆゑ。さしも大きなる巖なるが。これ木のたち栄ゆるに。ものびて。ふとりわたれり。これ木のおひたつかい。いとこまやかなるまもりなり。これを櫻雲石と以へり。むかし人乃うたに。ねもあれば いはをとも松を物ひとまり。とよめり。近きかた人の詩に。松生絶壁不知土。さるにいひて。松いきる事もあれど。櫻のかくるえいとめづらし。ふる舊藩の士族目時隆之進。中島源藏の子どもと。行在にめして。ふたり共者の父乃勤王忠節の厚こと。ひに自殺する事どもと賞さを

給ひ。祭祀の料。金十五圓づゝをあたへ。行在ハ。草津金吾とゐへる士族の家なり。こゝに者冨人あて。こゝび御輦をそゞ免奉らまゝ〳〵思ひ。母屋ひさゝをそどもも清らめ〳〵ひ。まゝ門よりたゞちあハ。大路のうさにとゐらまぬゝより。ゆどゝ結まへる人の家どもを買ひて。そりのまさを。道をひゝそゝ。その費につくまる金いくばく乃事なりけん。されどゝ物ともあるそで。いゆゝひろき輦路をつゝれるゝ。とまのゝれゝび。此者をゆくゝより御用ゆゝ結ゝ和ゝ むゝ成恐ゝゝべまひて。

物産のわゞをゝるゝ力をつくゝ〳〵志をめてゝ世給ひ。これこゝにつき。かゝまゝおほゝめすゝを。岩倉の牧こゝび仰つゝゝらゝ。世のかゞりのめゝぼく。何事ゝこれゝらむ。と涙をゝゞゝてよろゝびゝゝ。此者よりたゝまりし紅梅といふのちゞ。いと味ひよ。おゝゝにゝゝひて。ゝゝゞうゝめゝるうこまりに。

正風

ゝちゐゝん心ゐゝい紅のうめ話をゝる白ひゝ氣

この郎

ちのたゆみざく。つゝめて世と社あるべにこゝまつり〜
こゝ所ん。くゝ色ちんこゝちる保ごおのれもめ〜行りて。行
在ふまゆりちるみ。りとゝ社南部の家老南部專次とい
ふ者より。さゝげたる古文書どもを見をゆか。專次の
こゝわつおや三郎實長い。新羅三郎義光の曾孫。加賀美
次郎遠光の子。南部三郎光行の次男なり。もゝど光甲斐
ふちゝて。波木井御牧飯野ゆ三庄を領り。波木井の梅
本ゝとゝまり。當時い氏と波木井こいひき。曆仁元年正

月ゝ。頼經將軍上洛の時。兄實光とともに扈從つり。後
日蓮の門ゝ入て日圓こいひ。今も身延山ふ波木井
堂とくあるい。この者乃ためふ建てられ新べし。そ
の實光より四代師行。まごとい南部次郎政行の次男
なりしこのば。ちゝまゝより南部を氏とせり。建武元年ゝ。顯
家ちちゝくの國司なりし時。國代といふ者にゝまり。
今を顯家卿社國宣二十三通なり。かくて延元二
年ゆ。顯家ゝまゝのひ。高氏こ戦ひ。曆應元年安倍野ゝ
て。顯家と共に討死せり。そゝ時從ひて死せし郎等百

八人。そ是より引つゞき。力を朝廷に尽して。足利の賊とうとんことをのゝはこのゝごちきり。五代を政長。六代を信政。七代を信光。八代を政光といふ。明徳三年に。天皇吉野より都にうつゝせゝる時。本宗南部守行。義満に降るべきよしを諭しかどをほ従ちば。さるりよを足利氏の疑ひをとゝもしかば。守行周旋てゝちのくに下し。八戸に居らしめき。これより八戸を氏とせり。その後年久しくつゝく。十九代直栄。南部信直と共に。小田原に出て。豊臣太閤に謁しまを。二十二代某

寛永四年に。閉伊郡遠野にうつまゝく一万三千石餘を領まり。三十代義堯の代に。まゝ南部を氏とせまを。今の専次い三十三代に當まて。かくの如く系統あゞ毋のなる譜代の家ゞうまれば。おほゆるよりは何ちを。まをあひて。こゝびその古文書どもの保護料として。こゞねそこゞくあゝまを。その文書乃中に。延元く年八月六日の鎮守府軍監有實の奉書に。高氏直義。五月に都ふ攻以まりといゝごゞ。七月十五日に自害せしより載せたり。乱世世まゝあれば。千里のをちたる。訛傳もおほ

八人。そ也より引つゞき。力を朝廷ゑ尽して。足利の賊
とうとんことをのそはこのゝごちをり。五代を政長。六
代を信政。七代を信光。八代を政光といふ。明徳三年
ゐ。天皇吉野より都にうつらせゐる時。本宗南部守
行。義満ゐ降るべきよしを諭しかどをほ従ちば。さ
るりよを足利氏の疑ひをもあしうば。守行周旋て。そ
ちのくゐ下し。八戸ゐ居らしをき。これより八戸を氏
とせり。そ也後年久しくつく。十九代直栄。南部信直と
共ゑ。小田原ゐ出て。豊臣太閤ゑ謁しをる。二十二代某

寛永四年ゐ。閉伊郡遠野ゐうつるく一万三千石餘を
領をり。三十代義堯の代ゐ。まゝ南部を氏とせる。今の
専次い三十三代に當る。かくの如く系統あゞゆくの
をる譜代の家ゞうまれば。おほゆるゐ何をも也をを
ゐひて。そゝびその古文書どもの保護料として。こゞね
そこぞくゐ。其の文書乃中ゐ。延元く年八月六日
の鎮守府軍監有實の奉書に。高氏直義。五月ゐ都ゐ攻
いをりといゝぐゐ。七月十五日ゑ自害せしより載せ
たり。乱也世ゑあれば。千里のをちをる。訛傳ゑおほ

かりしかど。これらもまた屋しかく さみまた。
坊ちゃの軒ごとに燈火てらして。畫の如くなるに。若き
男とこれいとあまた。うるはしく粧ひて。笛鼓をあい
せ。きんを踊とこのいふわざをなす。拍子おもしろくて。む
うしかなら是ぞしまも思ひ出らるる。御前まもな
くれはてけりとなん。
八日てけふ。盛岡とうろ。町のまづ是より。勧業場のを
これ。十七八より。はたちばかりなるが。うるはしく粧ひ。
袴きてたり。これみつぐきて。学校の生徒も千人あ

まり。をのこらい洋服。をとめあいふり袖袴きたるがおの
くて。なまこなるり。ゆうく山路にかゝまる屐のひろき
野ゐ。駒のなきるこがあるこゆ。

ほうりつぐぬ反歌のきき打まびき聖うひの弱乃
あきるこのきぐこゆ

東久世通禧

名高き厨川の柵のなとる。未申のうこにあり。いとふ
るき城なりしを。文禄元年に。南部氏これをこぼてる
よしまり。三里ばかりの末て。千本松らいふ屐よ御憩ひ

所をのまへたり。はるこのみ岩手山を望むに。峰ハ雲かくるゝとゝ見えたれど。裾野のさま。はるゝゝみ布自の如し。さて雪をいただきたり。口にふくめるり。ゆゞてそゞ〳〵まで見ゆ。やこのよ生れたり。

いまで山麓日まぶり きえぞがて結雪こそ人のに

にとまり〳〵迄

岸田吟香

雲のきえたる雲のきえたる新いまぞ

るき山路でのゝ

人烟稀少客程長。馬首方知入=辭郷。北上源頭行欲尽。

杉孫七郎

滿山如雪栗花香。

雪の平といふ所あり。ぶな松あり。枝葉のさゝめづ〳〵しゝ。そのこゝろと牧堀といふ處ゝ。金勢社とゝあるゝ。

増見巡覽記ゝ見えたれど。所乃人の。社い焼失たりと以つゞ。尋もとで過たるに。後ゝ吟香が加てるとゝけで。いつゝ大きなる石の陰莖ゝ。めづらしく紀りのなり

ぐゝ俳諧(はかい)ゝ。めきたれどいつゝをゝ。

杉孫七郎

とぞ。このわらはを盛岡にてうねめ屋あれどいてく鄙びく。この紙巡覧記よ。そだ板をさゝゆのあゝ。あるい虎杖の枯るを砕きて。ちひさき紙箱にいれ。かたちあのくまにつりおきく。尿まるたびに用るい。うらゝ弱ふまよひとゝと以へまを。されど皇國まてい。たゝひ鄙のきをあり。とゝも。以ゆゝき民の家ちゝでん。かゝ物をばりらるねと。をゝろらゝいちうゝば。物のれある書にゝるを数をゝるゐ。北齊の文宣帝の厠よゆくとき。楊愔をゝて厠籌を執らゝをられゝるを。これをのどの

尊くおもをゝるゝ。あほ厠籌まて紙を用ゐば。まゝ法の師乃厠よゆく律をゝるをるに厠籌あり。これ佛の道ゝ清き紙もねとゝ。といつるゝ。あれ厠籌あて紙を用るざりき。こゝ紙りて。おりへをゝろゝい。下ざゐのをゝをゝで。ゆん。ごとゝ形き人ゝ。ひゐのゝゝ形ゝで。都のうちゝ。ゝるに。かゝ。まをゝん。いてこ穢なる國ぶりゝあるのあゝとふと巡覧記よゝ紙をゝおもひ出るまゝに。ゝに書のをゝ。をゝるゝめゝう。こゝびい御輦をむこへ奉るまゝうけゆゝ。ゝまやゝく。心のゝぎりを尽ゝて。ゝひ

物するのをもちをそなへ。よろづの器も。たらぬをば縣廳より拵ぎれひ。厠などをも。いと清らかにひたまへば。さるなかにきるいさにたるれども。常の者のけぞめるもん。まべく男をもれのさるも。けふの姿くこうに当る心ちす。渋民よりのくひるけうぶ。この町の口に。小学乃生徒七八十人ばかり出るもう。さるあるこのあり様にもうもなるもの。教へ草のあるべ。ぞまり。午後四時ぞのまに沼宮内よりつのせるもう。ちよりまへる。蘆田内江刈内などいふ村もありて。これ

ら沼内。それぞ詞ある道ば。このあるうむこのへ蝦夷のすそのありうん。所のさるもかもさるもうこと

にうそ

九日はふもとけきのふ乃如し。沼宮内より二里ばかり来て。北上山新通宝寺といふ寺あり本尊の観音乃像は。頼義の護身佛なりとぞ。義家の矢乃根。まと前九年のこうもの陣釜などあれども。それ あ神きのもの。

うしろの加と乃杉の木もとに。弓筈の清水とて。岩間よりこくくと涌出る水あり。いと清し。こは頼義賊

と初ひ来りに。士卒暑さに苦しめれども。水無ければ。神祇にいのりて。弓乃頭をもて岩根をとうでるに。その処わきて吹出せり。といひつたへたり。文久元年に。東叡山の壽昌院の僧都光映。碑をたてる。その事を記せり。されど地勢を思ふに。水の元なるしるいふいひぶこう。つつ頼義のおひ来りと以へるい。貞任の事なるべきを。かれい厨川にて殺さまるれば。かくるおくまで。いかなる者の跡をとめて来つらん。いとあやし。おそらくい事好める者の附會なる

歟。馬羽松といふ処。陸中と陸奥との境なりて。中でい岩手縣。北よりい青森縣なり。此やうり。道のほとりに。屋かくべき家もなければ。まして左も右もけうこれ草原のみにて。人のかよふあとも見えぬぞのみなり。中山坂とて。小繋につきて。ひる食をぶ。北へ向て山道。のぞりくるいとおほく。車に上下なる事いく度とれくして。高善寺村に至る。

木戸孝允

夾路長松翠色濃。水車聲裏夕陽春。原頭立馬人烟少。

只見山峰千萬重。

おゝに一戸の生徒五百人ばかりもあるなり。四ど
あるくゆゑにつきぬ。

十日空いこのゝどこのれり。一戸を朝たちて来るあ。波う
ち坂とて さのゝき山こちなり。こゝを末の松山とい
ふ。ものにむかへて。本の松中の松などゝ。ふる紀書あ
も見えたる事ゝ。こゝいあゝへの事ゝ人の。ゆをなげ
しくるたとらでは。ゝ歌ことのり。それをなぐ
末の山こちたくよめる歌もあれど。おりゝは須恵

ゝ地名(ところのな)きと。此あるりに。さる字(ゝ)もきてのねべ。猶
おぼつかこのれし。今も貝の化石の出るをりて。むゝ波
のこえゝりよりあるどかゝいゝ。わらふにえ
ぬこゝあて。君をあるくなどんをそがめこゝば末の松
山波をこえれん。さゝあるゝ。末の松山に波のこえ世
こゝもあるれど。たゝしちうひゝいこゝあゝん。そのり
難ゝれど。さゝぬるどゝ心をべりゝぬゝ弘
ゝこあて。波のこゆる事ある紀證(あか)ゝこそなれ。さるべい
このれる山の中あゝる。かくまむ。ゝあれど。ゝゝ

ゑだはあらんかぎり。その所といもむも何ういくるし
加茂べき。そゝいさらにこがみ。宮城のうゝれるよりいと
そゆるそのうゝ。きゝうゝてさいひつゞきまるもを
し。この山のもとにいと清きゝゝづの涌出るこがある哉。
汲て御憩ひ所ゝ先てまつ参る翁ありける。その桶に
そゝたりしうゝ。
足ひきの山ゝゝ水を汲あげて わの大者り沼茶さ
てまりる
これんありける。知るゝ人るまをとゝゝ結葉につゝね

たる。中ゝみたくゝゝを尽したるんよりもあもれ深し。

東久世通禧

まゝれゝぬ君のゝゆゑのる車りふこ特古ゆ色来
のまり山

正風

ゝくゝよゝゝの芝末乃松山をあげつゝのれゝ結こ
ゆる東まり

和歌

ゝ波のまゝそもゝゝゝゝこゆるり永時ゝきおい

の吉兆の松山

松平慶永

此の度い君の言ゆきまるとあるとなれば世やうゆうん
ひ者結ゆ川山

こいうゆうとまり。せうそのそに書ておられた
る歌なると。聞るまるみるについでぬ。かくて福
岡に入らんとする処に。稲荷の神ゆうあり。祠官小保
内某お子定身へ。さいつとり。おのれ京都にあるうし
ほど。そうひ来て物学べる人みて。志あるものこと

すこてびおの道供奉ゆうまつると聞て。よべ一戸
まで来ね来て。顧問まるたのめし。物産の事に注意
るようといふ。このほど。羊をあまる飼うなどの
たりて。そのゆとお憩そん事をこへ。おのれいたう
ぬわぎゆ。顧問にかくしくぶ。行在にて俄し奏せ
ら道き。そうより羊をも見。毛をて織たるこの
とも見むとて。顧問も立ら道。羅紗をもあらまの
しれよりべ。そこ器械のたゆすこうねび。
毛を東京にいてすお然るべうんと諭されき。此者

の家に。毛利家の小倉健作も。ひとをだのうこびま
すて。雀園梅花詩序をかゝれるがあり。養父の尚藏に
おくりてうきんらて。うつさせおきて。こゝに九戸左
近將監政實のこゝりし城のほとあり。政實ハ南部の
ぞうまて。本宗と得つゞのね憤より豊臣氏ようさくそむ
きしこゝ。豊臣秀次と大將ゝて。蒲生飛驒守。淺野彈正
大弼などゝ二万あまりの軍もく。取圍ゝたりしゝど。政
實膏腴なる地をたゝもりて。さうゝき山河のこゝあり
ようて。たゝもゝもなるを天の下と爭ひあり。さるを長光

寺の僧薩天と以ふ法師。欺きて降らをたりしこゝむ。亡
ぼされまゝり。さゝをよるを。豊臣氏にかゞるべきみあ
らぬこゝゝハ知らをれゞ。とゝれかくまを。上方の軍
どゝ久しく攻なゝゝをを薩天をつゝひけ
れ。さををゞ政實の勇武ゝのまをありといふゞ。この福
岡金田一乃あゝりハ。沼宮内渋民ゝとよりも。女乃姿
なゞたをゝのおゝゆ。ゝうく海辺ちゝくなりゆゝれ
るべし。されどゝゝ坂いけをゝ紀のおゝくて。車をや
ゝゝゝゝ。三戸ようゝゝぬ。多賀城の碑ゝ。去蝦夷

國界四百廿里となり。こゝいはゆる六丁一里なれど。今の七十里ばかりなり。碑の所より。金田一三戸の際まで。あるこゝそのころの郡名なり。奈良の御代乃天平宝字のころい。これより北くてこれえぞの地あて。租調徭乃三事をつかうまつる。公家の御民たるべき者へ。むとりもあらで。奥蝦夷こいひしえゝなるべん。その證ハ金田一の馬淵川と。里人いまべち川といひ。磐手山のふもとなる遠別。五戸ゐ。笘米知。まゝ不習とゐらあづ。釜沢とゝだゞ。ゆう。まゝかゝにいくる沼宮内。

ゆゝ田まいまゝどのまいゝ乃ゝぐひ。今もえぞ詞ゆのこまるゆゝまるべゝ。言どひの詞ゐい。いこのばゝこのゆゝわゝゝ老ど。そハ聞認めゝのゝけ老ど。地名のゝこゝにハひまゝ。然るゝ代を一年をゝゝひゝけゆき。三戸郡津輕郡ゝ。うちつ國とゐりて。渡島をゝ北海道とゐづゝ。ことゝく皇化に従ゝ老ゝ老ゐるハ。誠にゝゝゝのゝの浮代ゝゐゝ乃ゝ。

十一日てけことにより。朝ゝくたちて。うゐやのうちゝるこゝゝねの葱柱の橋このゝゝる川をわゝゝゆけ

ぞ。かゝる馬の墓こそ塚あり。ふる百とをぞる
まむかし物事とこゝや波斯國より。細馬奉りたりしを。
こゝの牧みつのもとに。種馬こそがわかまきをと。埋
めし處なりとぞ。牧のこゝかゝる事に。意を注ぐ
まゝあり。その西乃山本なる。三光菴といふ寺は。南部信
直の墓あり。文治年中は。南部三郎光行がすゝし本平
ぶ崎の城のほとりあり。そこより高山なりげとて。長
き坂よかゝ数。北ひんぐのゝ。海なるゝりえわと
ぞあゝき。こゝは御憩ひ所あり。かゝるに

前のひろさ七間ぞこゝは。おく弘入四間ぞこゝは。
んゝ。幄もて雨覆ひとゝ。そのうちに。八戸雪中の圖を
法くりたり。坊の家こゝより。そゞめ。神社佛閣い更ゝも
以ぞ。山は野は川を浦は。あるい長き橋をわたる
さまは。なるいゝとに船のつゞけ。以ぞ。以ぞ
ぞ。ゆゝのみつくりなゝ。その中ゆく。馬淵川の大
橋い。長さ八十四間幅五間あるゝ。ゝ。ゝ長者山
のふもとなる新羅の神ゝ。鮫萼島のいゝくゝまの
社なゝぞい。少ゝ高き所なるゆゑみ。ことにあぐゆゝの

て。島蔭よ蒸氣船とつれぎたり。さるいはぎたり巧さを尽しられごる。さる物産の品をつどへてきたれを。大工細工のををかりたる処いきくきるこそ。其の次み。餅こうきね。こハ七五三の數みなぞ〳〵へく。下を七斗こう宮。中を五斗がく宮。上を三斗で宮にせ〳〵。いこ大きかるをの者を。さ〳〵渡〳〵六尺の四方よ出る。たり。その次に。ものめ煎るかりほを搆へ。八戸の女ぞも。十四五よりたちばりの。こめるれが。うるたき衣きて。供奉の人こみこためきたむ。さぞり長きうまみ路の回どめく。くきく物わんがをもよろこぞ。しをみひしこうど。まぞかる事ハなこうき。まるこべ。三戸まて。白き洋服し。背み義字を記きるをのと六七十人鳶口たつさへて。行在の四方をめぐり。非常を警しむるさまかりしハ。縣廳よりあわせ〳〵者どもみやと思ひしに。これきるこハ八戸きて。せめてかきこのりの事と。ぞみ。御輦近くてのうまへ〳〵ぞやきて。かこ〳〵ひ來きるかりとぞ。まみもきほ五戸まで。こ出りへに從一宮。さるハ八戸ハ南部氏のもと城まて。今ハふりみ

里なれど。なほ栄ゆる所なるまゝに。たゞちに
かゝりて行幸のあるべきなれば。なるべおりはべりて かゝる事
とのうけたまはりたりとかんん。これをもて。庁部の者ども
で。大御光をうけ奉るを知る。十一時ごろに五
戸につきぬ。橋本素淳といふ繪師。七十五なれるが。
おのゞゆゑりにうづねたり。ものゝゆゑにて春琴
といふ者を学べるよしなどかたりて。かゝる老をせ
たり。これてこの岩倉のおとゞにまゐらせ。天覧をそ
なへ奉るべし。晒布一匹こゝにあり。此者も八戸

人みて。かゝるいとなびたるゝ為。俗びたるこゝ
ろもちのくにていと老ぎたる所なりき。
十二日けふもてけよし。五戸川橋かゝりき。さて戸へ
りの字みつれたる里へ。いづくもあるべきこゝろぶ
八時にたゝねほとゝぎす。傳法寺に休る。こゝ小家が
ちにて。物むつかしのるゝまゝかり。道のほとりめ
田に賤の男こゝもいとあまた出て。草こるさまゆゑ
奉まり。藤島に御憩ひ屢まうまり。相坂川をわたる。
六のほど水ハ出くれまれど。大きなる川にて。長き橋

と三所のあるなり。三本木といふうまゆまをひる食れうぶ。うのやどいやしきあれ屋なれど。ありやのうちにかよふ所ゐ。くものむしろしるい。いやめくしれさてちをんしるる。此わりたぐ限りもあれ曠野のうありしに。新渡戸常澄とて南部の家人なりしが。ゆえありてさそひたりしほど。開拓く事ゐ心ありし人ゐて。さてゐあまこの田畠を墾り村を建なり。戸の数二百ぞうもなりといひて其常澄。明治四年ヨ死なりしこのび。子をあくしく出て物なまひなり。かくるえ

ぐひをぞ力田の者とそ。いとく賞させゐよこの。古しへよりの例なり。

恩入民心似父慈。看他日〻掃残碑。要知此老經営路。
渾在當年落托時。

土方久元

さるあくの野の末なるけゐや。人もいやしきいえぞ結者ゐとおりゐはこのなれり。さ色ど女の中にそうゐは
しれきねふり袖をど著るこのすぐ出るれ。たぐ家ゐ
ん誠まそくるくてもむねくしれいひとつとなるり

ける。このうまやより来る道。左ゝぎてゝに野まて。その
の廣さ那須野まもまされる中ゝにあもきる。かの野
い木立ゝぎりて。限の知まぎりゝのど。たゝい目にさ
きる樹ひとゝのゝをゝかく。たゞ短き草ぞのりあて。中ふ
ひとゝたゞ白く引きゝてゝらゆるこの道ありゝ。少しゞ
のぼり下りきる處もありて。十二時ごろ七戸につき
ぬ。うまゆ結入口ふ。小学生のあゝゝゆるが、洋服ゝ
きる児。振袖のむすめあゝゝどもなりて。所ゞゝあもきゞ
きる今めゝゝきゝり。御輦ゝぎゝに出ゝる女どもに

ふ。すゞゝゝるきゝゝかゝる處にいつゝたきてがお
回こる。いこのゝる中ゝ為ゝまゝゝゝゝゝ。會津の廢藩にお
ゝゝ後士族あゝゝゝゝゝ来て。ゝゝ田墾ゝれどゝる。
そゝつゝ娘きりこゝゝる。
十三日てけよゝ。ゝゝたる七戸をゝて。二里ぞのり
ふ来ゝりとおほゆる処に。川あり。橋の長き短ゝがを
ゝゝかゝきり。欄干の葱柱は壺川橋とゝきゝり。わ
きりてすゝゝぎりり乃坂をのゞ登ゞ壺村きゝり。この
わゝりきそ。壺の碑結ある廢ゝとまづゆゝゝくて御

憩ひ所のあるべにて。さいつ比参事の来ぬひて。千曳神社のかたちを堀せられども。あらぬよしなりこいふ。そこより六七町余て鳥居あり。車とゞそのまゝにそをて。細道の露わけて。八九丁も入しゐ。社あり。そのうしろに。いと大きなる穴をいくつを穿ちたり。むかし仙堂ゐ。多賀の碑をほり出しが如く。猶ひろく物しるしんにい。たづねあるゐもあるをんされどいてろにてる。民の煩ひをいとをゐおゐん事をれば。そをて。りと社道をゐ。

まゝ草をこりの廣野をわたて。野邊地よつをね。

岩倉具視

みちのくの野をる山をる わたるをむりをを社
ぶつぼかいふ

引をのひし御うまのうちに。あるりゐより奉まる。花鳥といへるハ。殊ゐふるくさくまくくを。千里をる時のまうかをのゆゝくををに。をのゆくこの里ゐて艶ゐよけを。おの逸にをれが長歌ををて奉れと仰ををのありをまが

久堅はあめりにおちゐに。細雨のふるまいありと。風
の音乃遠音にきこえしばるにみえ露おきさけて朝
庭にひくのを給ひ。夕庭にのらをあひ。花鳥こゝろまし
名つまで。その色を花とながめつゝ。その声を音によ
そへて。あさゆふの愛のあまりに。此度は大君供にな
はかへしめぬひしものを。あはれくその花鳥は。岩
がねのさびしき道に。ゆきふゆきやしぬらん。あ
らがねの土さへさくる暑き日になへゆきしまん。
人なるが労なりこ。おそしてもこゞまら侍しを。人

ならばなつきたへしとおもひてはいこひてまし
を。むかし人のひきはすみく昔しかは以そであくぎ
て。こちはく乃あら野の末は。艸むらについにいや
しね。かしこくもちよあぎましてねもごろに志が
なれがらを。埋むべくのらをらまひつ。金りてかぞ
は買ふこふあぢれたきわざは何きんざらばとし
物に及ばぬ。大君の大徳の。かくしあまるば世には
ひつくべまる。更に続く出ましにさこゆく翁。

高崎正風

色もねばこのすゝりきえし花色の跡しるたゝんあ

さま美風

かくよめるゝ。花鳥と共に春風といふ馬をもたゝせま

ゝりしによりてゝり。とよひの御神どりい。めづらし

く海よめぞあるゝよれ所みて。小學の生徒もいせ参

た。奉迎こゝのゝる幟をたゝて。そのこゝれ洋服。そと

色ゝれふり袖袴まで。うるゝしく粧ひ出ゝり。神ぞ

のゝるゝを西村金七といふ。こゝふの菅薦のことをこ

ふに。そゝ近き所みこゝふの浦とゝ侍る。今もそゝみて

菅薦とゝあゝ侍るゝ。いひつゝしてゝ名を侍るゝ

こいふ。こゝふとゝ十節の義みて。万葉集ゝ天なるさゝ

らの小野の七相菅こゝなるふもふれり。ゝゝ同集に。

麻乎其母の布のゝゝゝてゝあるふゝ。ゝなり。こ

い編目をふゝといふ。そのゝを省きてふとゝいゝ

るゝみて。こゝふい十編ゝふハ七編ゝり。浦人がゝて來

たゝる。幅二尺五六寸ぞこのゝあゝて。その編目十ゝあり。い

とゝあゝゝゝ紀物ゝゝ。ふゝゝゝゝるゝ奢藩の

時い。むゝゝゝ弘毫以みて。こゝくとゝ のゝくとき

終てり。と以一首。これをそ

ゆるさとそ〜きこそ〜のゝ猿猴蓼さひ〜きこ

みの茂こる

東久世通禧

みふね ねて結てそ姉ハあるれども邪蓼〜き十荷

のすゝこと

おのれも

さ〜までのうま地くハ。鄙ひなる所といへども。これ

東京のふりとうつをるさまなり〜に。こゝハさんが

に海邊なるまゝや。酒も丹醸といづ〜。食物もかゝこの

さのさまゝ調ゝて。その外ものゝ。これ浪花よりそ

ゝぐせるよ〜なり。さるハ上件にも以へる如く。野辺

地のべちも。えゝど詞あて。むこ〜ハ蝦夷のすゝこのゝり

しと。衣服調度まゝでさとくく。都ゝうそゝるけだゝ

きハ。いゝ〜一の聖乃御代なゝ。いまゝ〜きこのゝ事なり

かゝ。

十四日てけきのふゝ如し。ゝふハいゝゝ遠ゝれゝこて。

一番ゝりよゝ起出て。夜のうちに朝ゝがれひゝゝ。顧

問ことゝに出さらね。濱べのさら。まさご清らあて石
ゝきく。まさご足ふさまぐむぞこのりの深砂あゝね
ぞ。あゆゝよくて。車いとゝあく。四里半ぞのり來て小
湊といふ處あ。ゑるの清きまうけしられど。まぐ七時ま
ゝきねほとれ出べ。宿ゝたちゝよゝぞうものすぎぬ。
まさ四里半ぞうを來て。野内まり。ぞゝより青森まで。
二里あまり。ゐのきを十一里のさらを。九時をこのりに
つきね。中食終りてのち氷を出せる紙囓てあゝきを
ちらをり。ゑれく後。吟香をとるゝひ。宿の者みあるゐ

きせく。坊のうちをあそびゐりきゝ。御輦ぞゐまんと
てつゞくる人ゐほく廣きゐ用ゐ。所を紀すでたちこ
そを。坊のうちに芝居輕業たとゆう結物もあれべこて
かゝこ。いを賬をゝことよひ下沢保躬がゆとりとを
ふをあこせをり。ひゝきられべ。
そゝ結濱ゐのうゝまさゝ人みあのゐくをべと
ふべこりをを
十五日てけよゝ。あゝい箱館にゆをゝをあゝんとて。
人ゝそのいをぞこるゝ。おのれゝをこぞをべ調度課

にかゝりて。身みをへつゞる物のこと。乗る船に積んと
也。りふ永田盛信。開拓のことをまく松前にわたるといふ。
久しく同じ艪ぎりみ起ふしてを道すがらもかゝる
ひかたしく人まれべ。そゞろまわこの道うし
えそぞ〜ま田よ マくもりて君が代乃杖のいれを
沽波のよるすよ
こよるそ〜ぬん岩〜りる。こは縣の官人みを山崎弓雄と
いふ者あり。和のゝが京都みなりし田どに。度こなひし
人なり。まこと弘前の士族に大道寺繁禎。唐牛擔といふ

者なり。こふひ來て歌ぶくりでるに。繁禎岩城山の
名み歌かゝんまこと紙こふ。筆さしぬゝして。
いたき山谷沽氷しわるきこの浮まにこもんとけ
ふやまいりん
主へ止いたゝみて競馬をこれをきり。のこの弘前
の士族の者どもつゝまるまり。
十六日てけのゆこのゆり。午前五時み御船に乗こる
よゝさごなりしこそ。夜のうちより起出て。何くれと
いそきて。顧問い明治丸み乗らるよゝ従者ど

そゝられそなた船みうつまり。盛信いきなふ蝦夷のゝ
たゝみわゝりぬ。吟香い高尾丸ゝわの主のりて。お話主
のゝひとゝテーホール なる主べ。たゞ たゞ〜箱館まで
乃事なりとゝおりゝ物うゝ。昨日まぢい。ぬるゝ あく
るゝひとゝ所みて。このゝゝにかゝゝひうはゝ〜をの
ゞ。にたゝみかゝあれゝゝなゝにわゝれて。ちさゝゝ
をちめ波乃ゝうりさまよふ。いこゞい心ほそのゝざゝ
む。時ぞのゝりて御船どる以ぞんゝゝ。音樂を奏〜
て。兵隊の者。縣官の者。学校の生徒らなど。廣き濱べに
ゝまるゝゝぞ。つゝなりておゝり奉主ゝ。沖なゝのゝ出て
中食たゝうぶ。食物ゝれ西洋風のゝるゞみをえゝゝべ
ぞ。空〜く食机のゝゝを立さゝんとゝるゝふ。おもひゝ
ゝのゝぞ。杉宮内少浦を見たゝ〜ゝそゝられしかゝ〜ゝ。
午後一時ぞのゝりみ箱館ゝつきゝぬ。宿のあるゞを佐野
傳左エ門といふ。そゝき人ゝゝゝえて煎茶のゝゝちゝのゝ
べたゝゝる。あるい紫泥の急須。あるい古銅の建水宗
都がゝより。西の國にゝゝてあゝゝ数さるゝゝゝして。
竹田の繪。山陽乃詩なゞのこのゝ物ゝけたる。ゝゝめく、

ぬちらちいてい。さうるえね今めきーこのさうちるる。おも
ふみ出ついい。浪花赤間關などに。大船のかるひらえね
慶まれど。おのづのーるれるるる。主上ふいと
めの日すれるる。開拓支廳学校などにゆきあるる。
出ようひ市人等。花火をたき。こうみこづりるる英人
らも。こきくの飾りめして。行幸とこゆふき奉る。
まと氷室會社より。いと大きれる水盤ゐ。鯉と放ち。
ーり青竹の串をわーて。氷をつこのきねて奉る。

富小路敬直

第こそのこうるこ流ーき猿れーそひむろよゑそわ
されるるれ

十七日ろもてけより。さんでゐ北の國ゐまび。あー
ちの間どいいら寒ーく。おのまーがを如き老ぶとい。綿
衣ちーでちちーでうき。朝がまひの後。吟香と共
に出づ。まげ浄玄寺といふ真宗の寺に入る。書院と行
在所とーて。本堂を博覽會の所とし。北海道の産物を
つーねちり。そのうちに。あひめーの家。まと漁船などめ
ひちーがと。何ーも乃器具でるるまーべ。るるとるに。

加賀つくりなれば一口の刀ありて。盆その外こまく造りつくる。
うれ雅びうゐをとこの。めとれゐ木工鐵匠のわざ
と教いぞ。うちつ國の者ともゐおとうめやいまこ
ろひ野人の。大路ゆくをとうたに。男いあやかり物の袖
ちり端折きて。きれゐふうち。女い裾ぐろ紀衣きて。志
ま一つり従ごひ。慎えるさゐ。物のづうり礼あり。とおく
ハうひ御輦をこのうゐ出たるゐたべ。それより濱
辺ゐ出て。臺場をうる。いとおうをこのゐ構へうり。やう
く暑くゐわりしうび。やごりに帰りて。中食たうべ。伐

氷商社の氷室うにゆく。ゐうれ処なまび。各車よりい
そぐ。氷室ハかつての如く。土の底ゐつくま藏めたる物
なるべし。ゐおりへるうさゐハいろで。三層ゐつくる
てし。いと大きゐる樓なり。板をて四方をふうれ鈍屑
につうて積うたうゐ。ゐくめうゐらば。外まゐあるべ
し。これを日ごとに船より東京ゐをとぶまうなり。そ
ハを出で。氷つくる池にもゆの生用こうしうど。日
をでゐ入まんとゐまび。ゆどりゐかつぬ。こうひ故
岡部春平が子權中講義大槁益城。開拓使主典野田太

吉。五島廣高。山上大神宮祠官沢邉德幸なども來まり。主上いろふ四里はうり屋ぐるまなく。七重村といふ処あり。開拓使の試驗場なり。そこにゆきてあくまで。こゝにハ。あるりうよりまるせ。菜ぐさ物のたくひ乃草木をもちゐ。東京の青山なを培養さて函館こうろくを。まさきにりて来て。ゆうくふ土コあれさきんといふつきれをる。その物産ハ思ひと尽さまとそなるハさんそなれり。まさ綿羊の牧。あるりうだちの牛牧をも過させぬひ。いをゆる五稜郭まなたちをを

ぬひて。戊辰のらく戦争のあと後くしくを尋めぐまたまくり。そもくかく天皇くさ皇化にくそのうねハあく。よりの海浪なをりうあ治りて。乃ふ此所に行幸しりもそをたどれば。官軍力を尽くして。とち廓をあとしいまくにようまくた。大御心よりもそのをりの乃予思ひ出させぬひて。討死せくく者どもの為ま。御袖をあぶらせぬひしとぞ。かくて伐水商社に立ようをぬひて。氷を伐る器械のくさくある後。その用ゐこのこどもをきたくめく。行在ようへくをぬひて。まさ悦同学校ま臨